

## 第4章 総括

### 第1節 文化遺物の特徴

#### 1 出土土器の編年的位置づけ

##### (1) 荒海式土器の研究史

荒海式土器制定をめぐって 西村正衛らによる荒海貝塚の第1次発掘調査で出土した土器<sup>(1)</sup>(図227~235)のうち、問題の大洞A、A'式に並行する土器は第2類であるが、西村はそれを次のように分類した〔西村1961:10-17〕。

- a 種) 大洞A式に比定される精製土器である。これは、「工字状文的意匠文を主体とする文様帯をとり、それに沈線による平行線文などが加えられ」ており、浮き出された彫刻的手法による千網式土器の浮線網状文に相似した意匠をなす(図227-8・20)。
- b 種) 大洞A式土器に比定される半精製の土器である。ヘラ描の工字状文、平行線文を施すが、浮線の様相は見られず、平坦な沈線手法による(図228-25)。
- c 種) 大洞A'式に比定される文様が表出される。意匠は連続三角文(三角連繫文)を主体とするもので、工字文表出の手法をとどめたものもある(図230-56・58・60・63・65)。
- d 種) 浮線網状文および工字文を模した疑似的文様をもった沈線文で、多くは平行線手法である(図230-70・71, 図231-77・78・80・84・90・94・105)。
- e 種) 粗製土器。条痕、刷毛目文が多く、撚糸文は非常に少ないが、貝層下に多い(図232-113, 図234-141, 図235-154・162)。

これら第2類土器を群馬県千網谷戸遺跡出土資料と比較して、c・d種が明らかでないことに注意がむけられた。そこで、大洞A式並行期よりものちの段階に位置づけられるc・d種と粗製土器を含めて「荒海式」と命名した〔西村1961:18〕。荒海式の発生から終末に至る持続期間を考える必要があるとし、d種に①工字文、網状文模倣の施文の間に単線や複線による曲線が配合され文様構成を複雑にしたもの、②そうした施文が直線化され、網状文は菱状文に転化したもの、③口辺部および頸部の施文が菱形を横に立ち切った三角文の施文に転化したもの、という流れのあることを推測した〔西村1961:14〕。

『科学読売』誌上で土器の記述を担当した馬目順一は、「荒海式土器とは、精製土器に変形工字文を彫文し、半精製土器に特異な雑書文がみられ、粗製土器に無文・条痕文の施されているものを総称」し、「精製土器が(中略)大洞A'Ⅰ式土器に酷似する」として、第2類c・d・e種をもって荒海式とした西村の当初案に忠実に従った〔西村ほか1965:30〕。なお、馬目はこのなかで、荒海式に後続する大洞A'Ⅱ式期に相当する段階として、埼玉県深谷市四十坂遺跡と茨城県筑西市女方遺跡出土土器により制定された四十坂・女方式期に比定できること〔西村ほか1965:31〕、大洞A式に併行する時期の関東地方は浮線網状文土器で一つに結ばれたかのような印象を受けやすいが、東部関東地方は粗製土器が著しく多いという地域色をもっていること〔西村ほか1965:30〕などを指摘

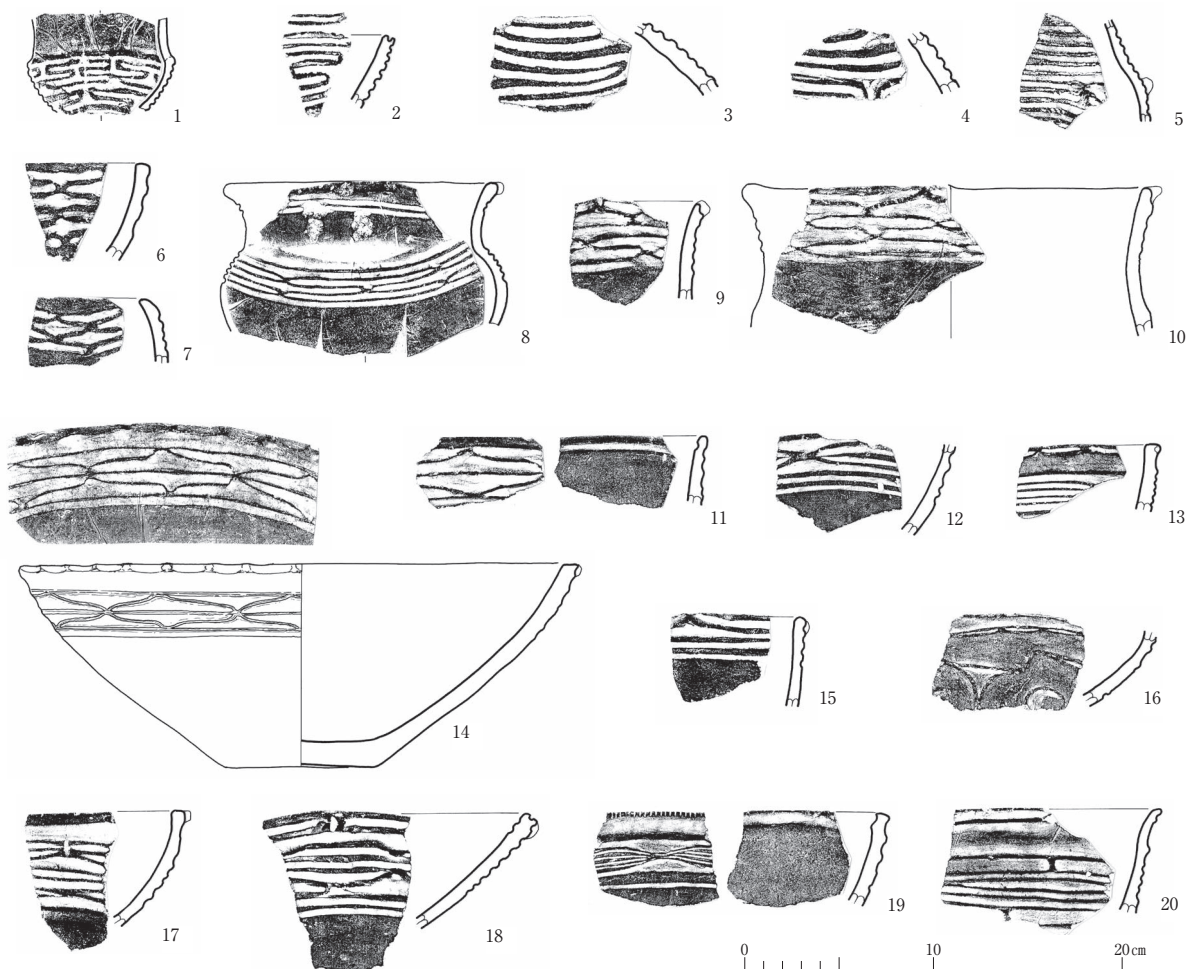


図227 西村正衛ら発掘の土器 (1)

した。後者の地域色に関しては、大洞A式期の東関東地方の特性として、沈線による工字文が施文されたものが少々みられることや、粗製土器は撚糸文だが、新しくなると刷毛目文土器なども併用されるといった、示唆的な指摘が多い。

**荒海貝塚出土土器による荒海式土器の吟味** 西村による第1次調査の本報告で、1961年論文の第2類は第Ⅷ～Ⅺ類に分類した〔西村1974:31-50〕。第Ⅷ類(図227-1・2・8・11・17・20, 図228-21・25・26・31・33・35・44, 図229-47・48・49, 図230-91)は千網式、杉田Ⅲ式に対比される土器で、かつてのa・b種である。第Ⅸ類(図230-56・58・60~67・69~71)は大洞A'式に対比される文様をもつもので、かつてのc・d種である。第Ⅹ類(図230-52・71・73, 図231-77・78・80・82・84・85・90・94・98・103~106・110)は浮線網状文、工字文および三角連繫文の疑似的文様をもったd種である。第Ⅺ類は粗製土器であり、撚糸文を施したa種(図232-112・113・116・121・122)、櫛目・ハケ目などの文様をもつb種(図233-125・130・132・133, 図234-141・144)、貝殻条痕文のc種(図235-150・152・154~156・160~162)、無文のd種、壺e種(図228-38・40)に分類した。かつてのe種である。

第Ⅷ類のうちb種の工字文・匹字文と平行線によるものに、次期の第Ⅸ類の三角連繫文に付随する大きなえぐり込み匹字文がすでに認められることから、次期の施文にかかわる手法の現われであるとした〔西村1974:41〕。第Ⅸ類は連続三角文ないしは変形工字文という文様を彫りつけ、工

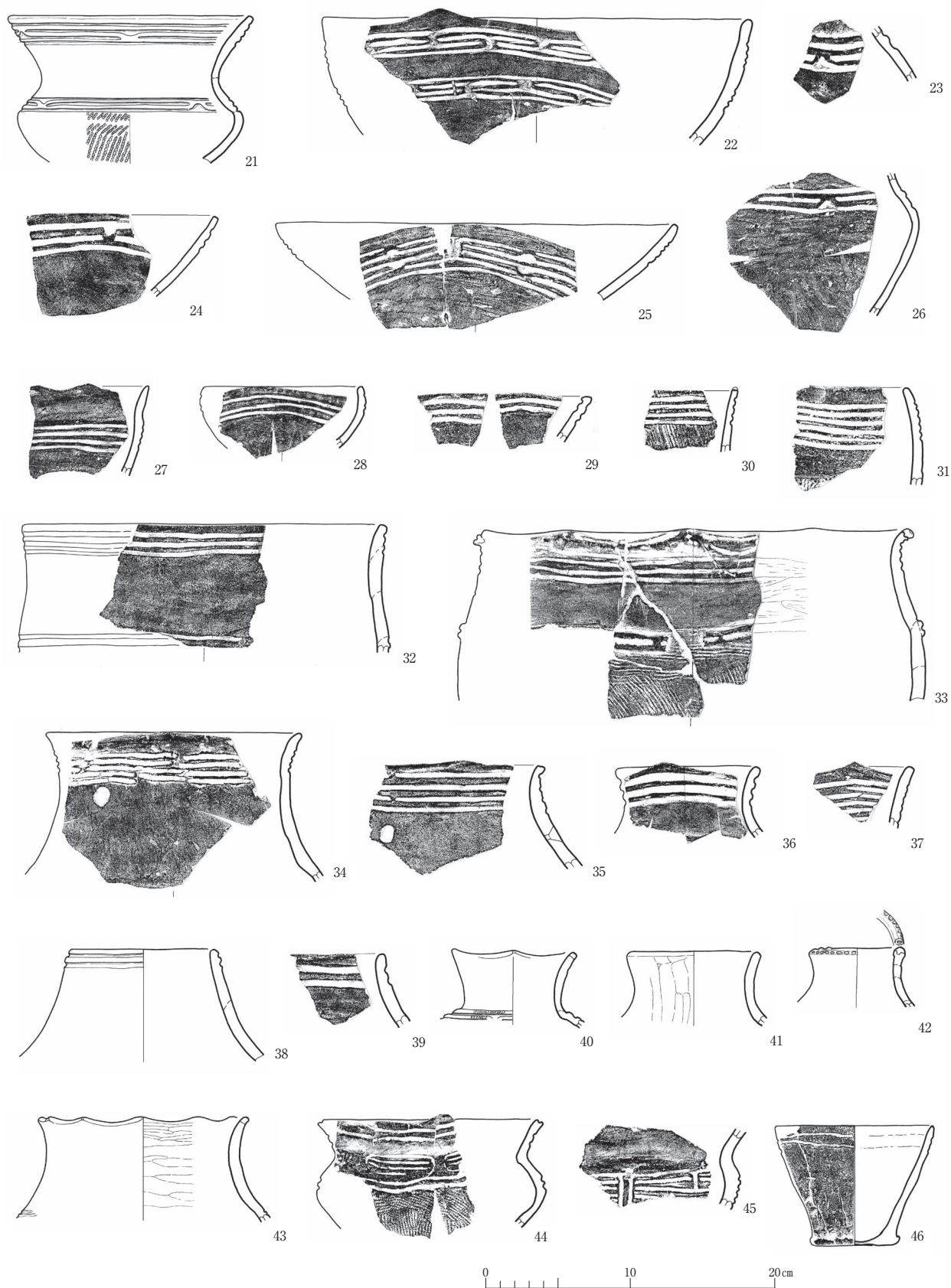


図 228 西村正衛ら発掘の土器 (2)



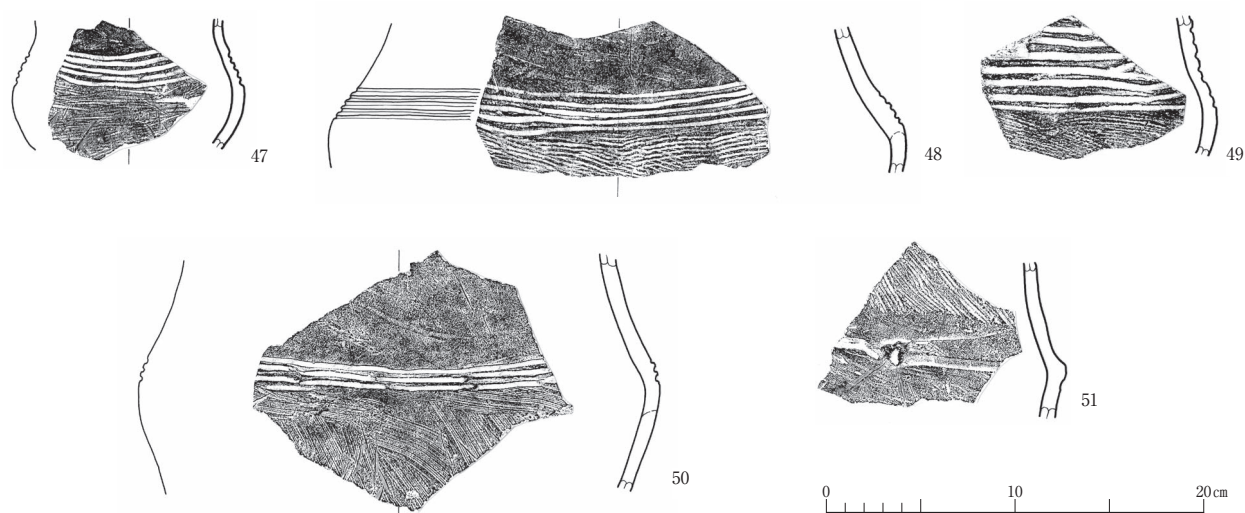


図 229 西村正衛ら発掘の土器 (3)

字文をもつ平行線文を客体的に添加するものだが、そのなかにも平行線文の数が多く、三角形の会合点の挟りが小さいもの(図 230-61)から、平行線が整理されて忘れられていこうとする趨勢(図 230-56・60・62・63)がうかがえることを指摘した〔西村 1974: 41〕。第Ⅹ類も同じように、たとえば三角連繫文の模倣において多くの平行線によるものから単線や線の省略に移行(図 231-98・103・105・110)すること、つまり複雑→単純な流れを想定している〔西村 1974: 44〕。

第Ⅷ類の大洞 A 式併行期の土器は第 1 次調査の G トレンチと H トレンチの混土貝層および純貝層で比較的単純に出土し〔西村ほか 1965: 37〕、第Ⅹ類土器が A トレンチに多く、第Ⅸ類土器と第Ⅺ類の貝殻条痕文の土器が B トレンチで多く出土したように、出土地点ごとに類型によって出土量を異にする傾向を指摘している〔西村 1974: 54〕。

そして、第Ⅸ類と第Ⅹ類を、千網、杉田Ⅲ式、すなわち第Ⅷ類に後続する終末的縄文段階を象徴するものとして粗製土器を含めて荒海式と命名した〔西村 1974: 55〕。

第 2 次調査の報告において、西村はこのような考えに若干の軌道修正をおこなった。すなわち、荒海式成立の大きな影響が東北地方の大洞 A' 式にあるにしても、その母体がこれも東北地方からの強い影響によって形成された大洞 A 式にあり、東北地方の文化の強い南進とともに荒海貝塚の地でその関係を緊密化することによって生み出された、と理解した〔西村 1976: 27〕。具体的には、①変形工字文のなかに付帯的な平行線を多く備えたものや線の施し方の拙劣なものがあり、それが大洞 A 式に対比される第Ⅷ類の工字文、匹字文を母体としてやがて大洞 A' 式に対比される図 230-57・72・74・75、図 231-100 など第ⅩⅥ類(第 1 次調査の第Ⅸ類)の三角連繫文、変形工字文として独立性を確立する、②図 231-79・87・89・99 など第ⅩⅦ類(第 1 次調査の第Ⅹ類)の浮線網状文の疑似的文様をもつ土器に三角連繫文や菱状文に似せた表現のものと両者の中間的なものがあり、千網・杉田Ⅲ式の後半から作り出され、その時々典型にそって表現をおこなった、というように在地的な展開を重視した〔西村 1976: 27〕。

こうした荒海貝塚 A 地点の土器にみられる大洞 A' 式揺籃の事象を捉えて、「荒海式は、大洞 A、A' 式と対比される編年的位置を与えることにおいて意味がある」と述べた〔西村 1976: 27〕。西村は『科学読売』において、荒海式土器は「大洞 A、A' 式比定」としているが〔西村ほか 1965: 28〕、この時点ですで見通しを立てていたのであろう<sup>(2)</sup>。



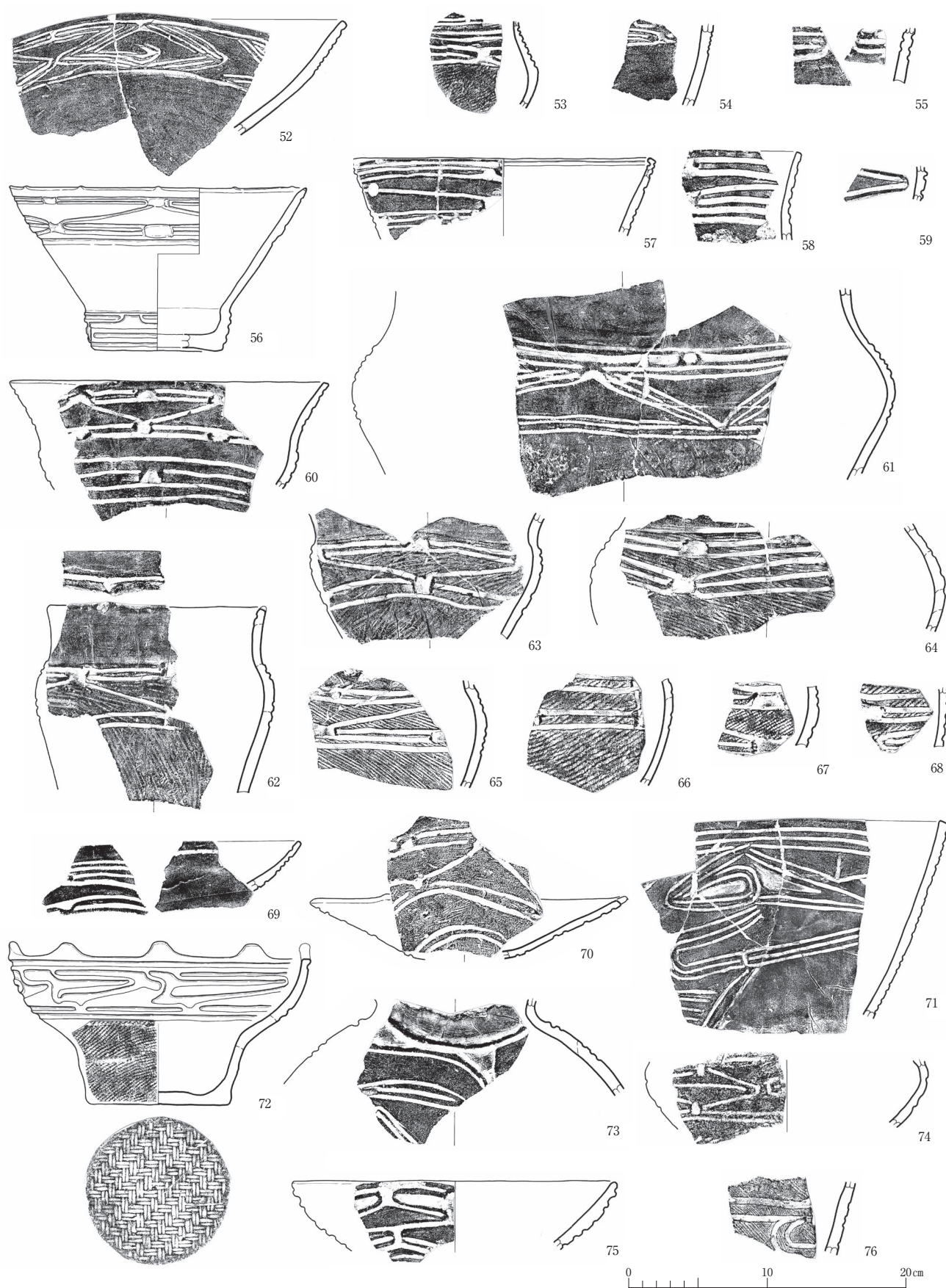


図 230 西村正衛ら発掘の土器 (4)



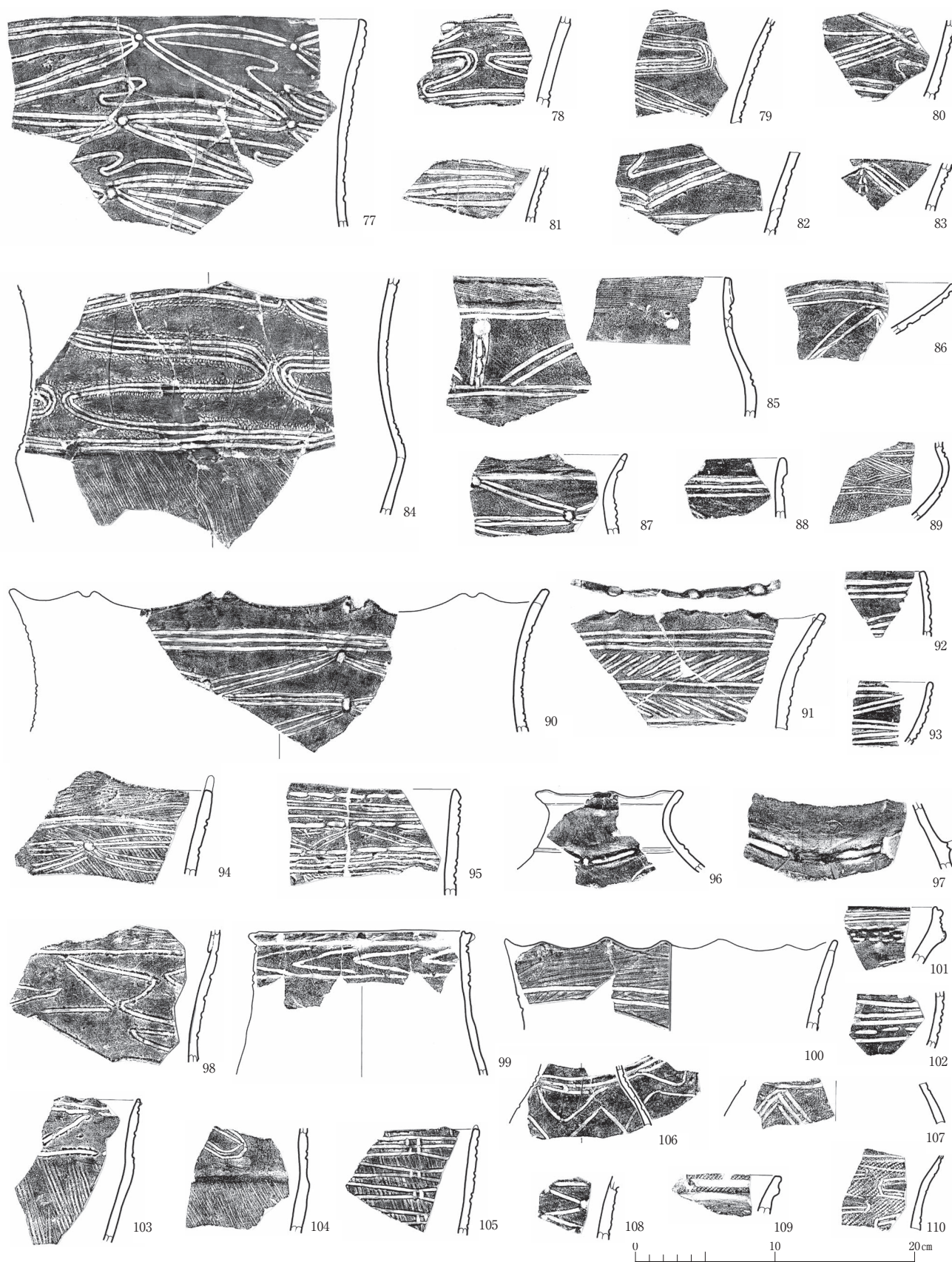


図 231 西村正衛ら発掘の土器 (5)

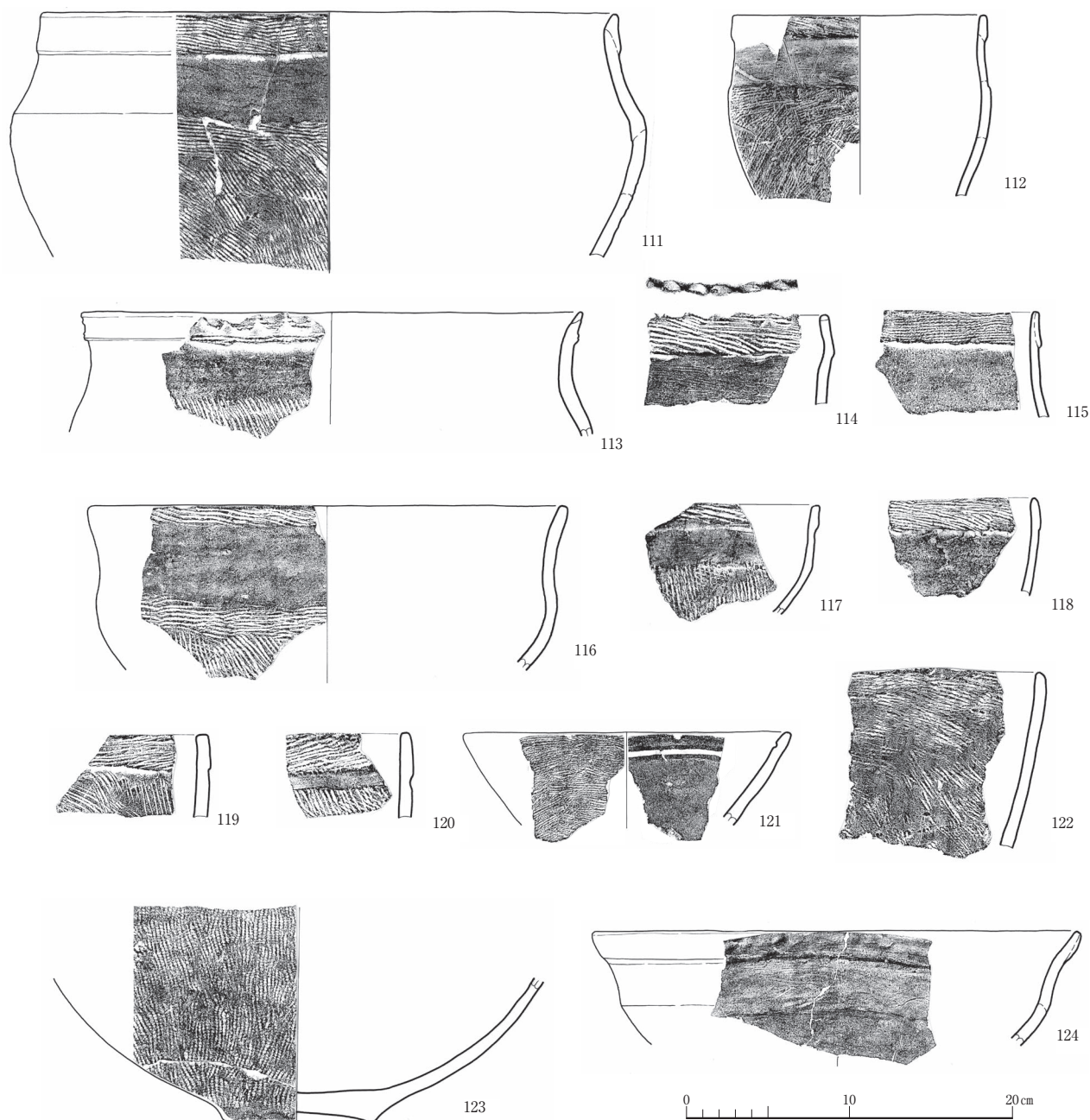


図 232 西村正衛ら発掘の土器 (6)

以上の点は、荒海貝塚第1次～第2次調査の発掘地点ごとの土器の様相の違いによって、明らかにされたことである。第2次調査で第Ⅳ類土器（図227-3・7・9・10・12～14・18・19，図228-22～24・27・34・36・37・46，図231-95）すなわち千網式・杉田Ⅲ式並行の土器は、J・K・G・Hトレンチで良好な包含状態を捉えた〔西村1984：593〕。第ⅩⅦ類土器は第1次調査のA・Bトレンチから大洞A'式に対比される土器と共伴するが、第2次調査ではG・Jトレンチから主体的に出土した〔西村1975：19〕。



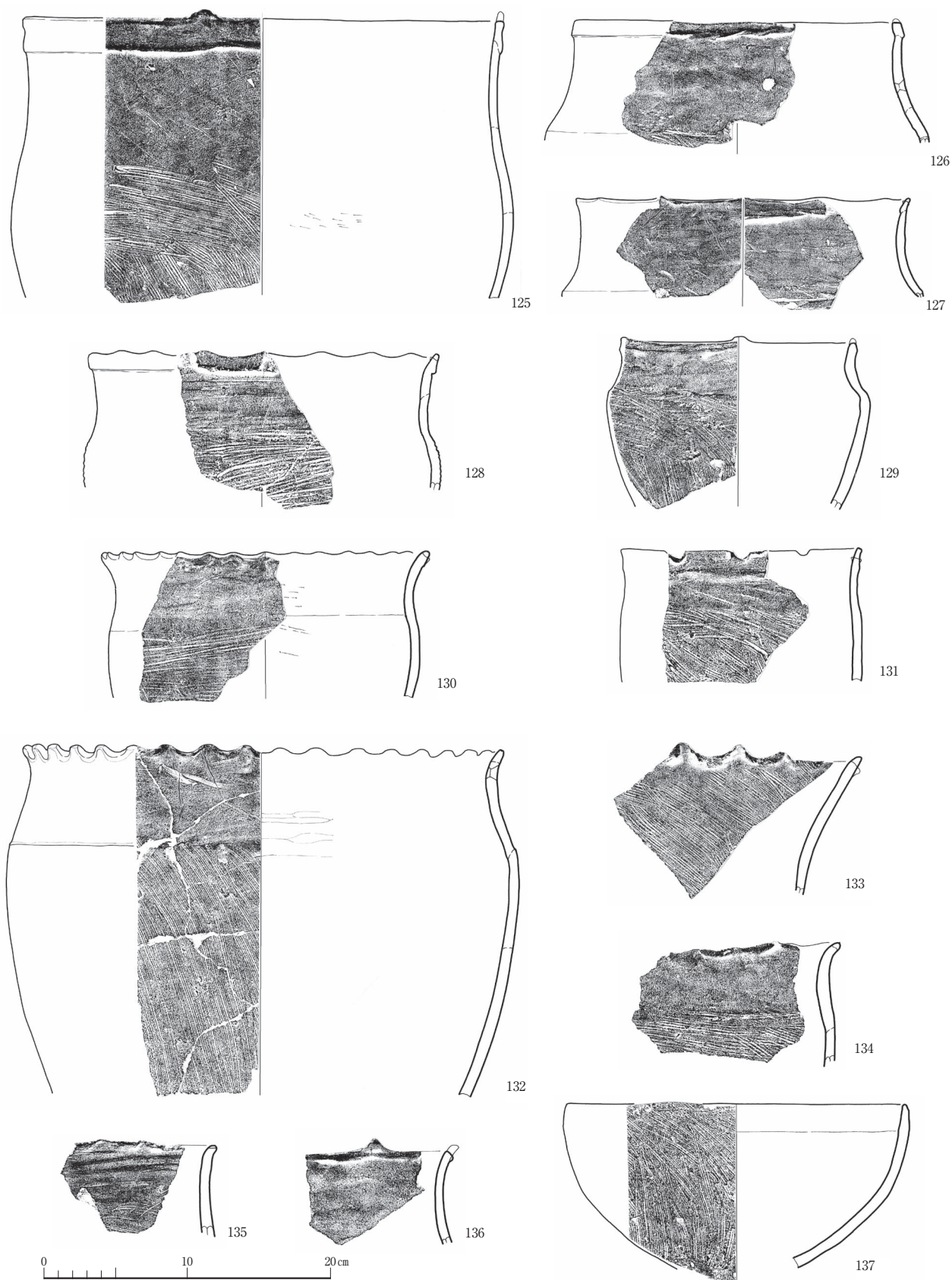


図 233 西村正衛ら発掘の土器 (7)

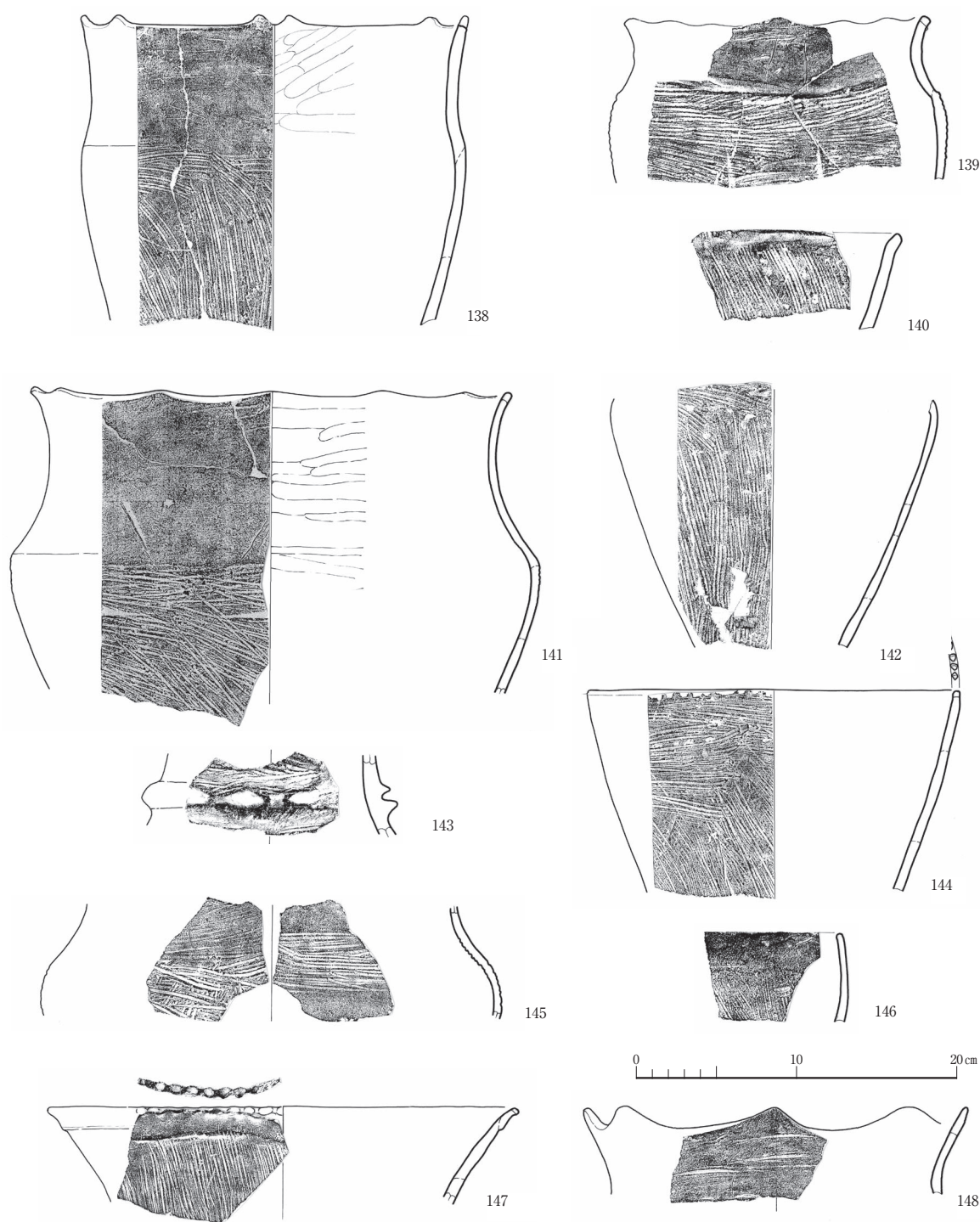


図 234 西村正衛ら発掘の土器 (8)

一方、第XVI類の変形工字文をもつ荒海式土器はE・Iトレンチを主体としており、G・Jトレンチでは目立った存在ではなかったようである〔西村1975：17〕。つまり、第X類土器は変形工字文以前に成立していたことが確認されたのである。また、第XVIII類（第一次の第XI類）の撚糸文によるa種（図232-111・114・115・117・119・120）、櫛目・ハケ目文のb種（図233-128・131・134・137、図234-138・140・146）、貝殻条痕文のc種（図234-139、図235-151・158・159）のうちc種の二



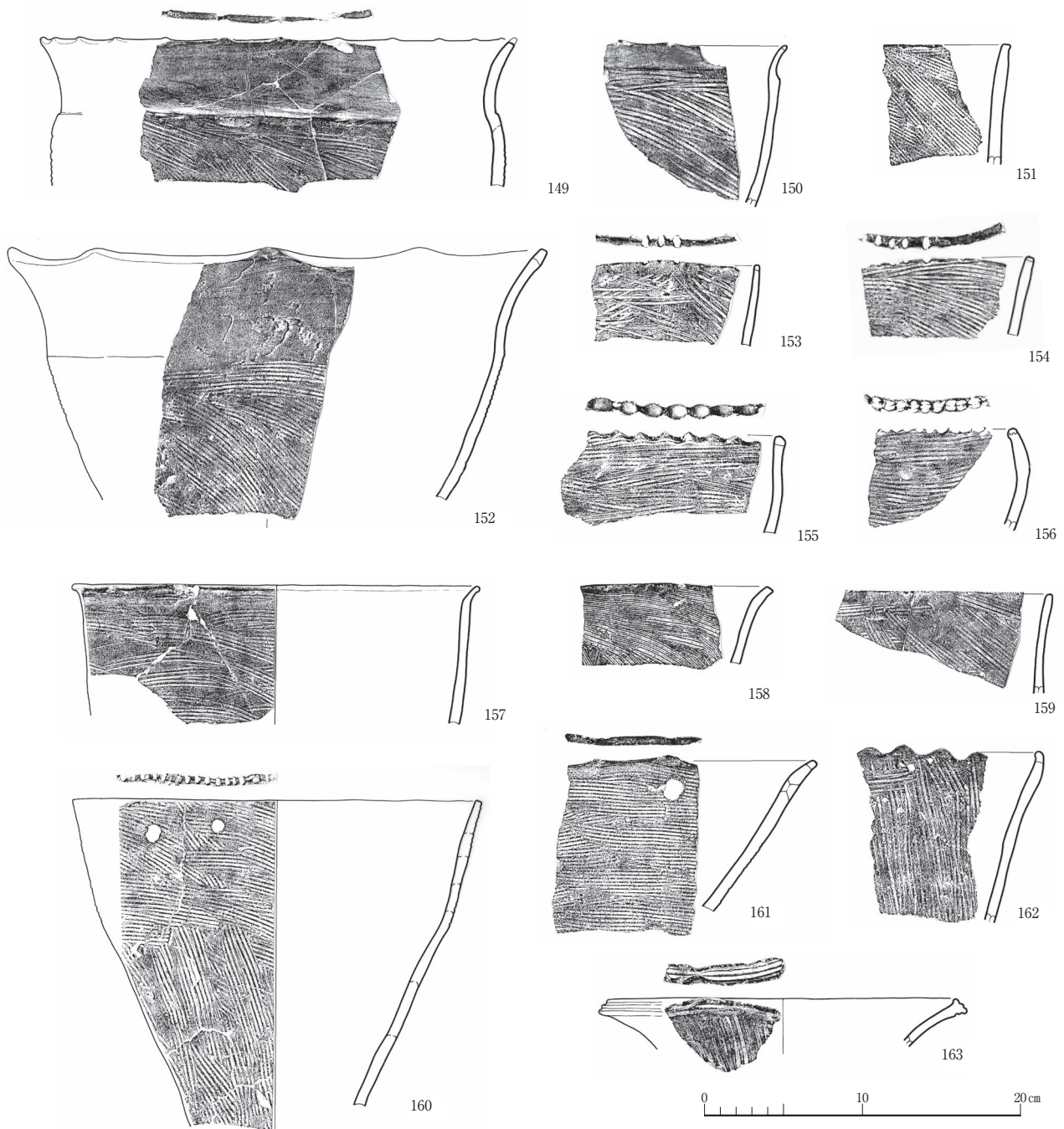


図 235 西村正衛ら発掘の土器 (9)

枚貝腹縁による条痕文土器は、E トレンチで最も多く、細密条痕の多かった G トレンチでは目立った存在ではないようである〔西村 1975 : 23〕。

このことからそれぞれのトレンチで主体となる土器は、J・K・G・H トレンチ＝千網式・杉田Ⅲ式・浮線網状文など疑似沈線文・細密条痕、A・B・E・I トレンチ＝変形工字文・変形工字文など疑似沈線文・二枚貝条痕、ということができよう。そうすると、A・B・E・I トレンチの主体が荒海 2 式であれば、J・K・G・H トレンチは荒海 1 式とそれ以前が主体になるということであり、本



表 76 図 227～235 の土器の出土場所と層位

混貝土層				貝層				
番号	トレンチ	区	層位	番号	トレンチ	区	層位	
163	D トレンチ	2 区	第 1 混貝土層上部	116	B トレンチ	2 区	混土貝層	
80	A トレンチ	1 区		混貝土層	152	B トレンチ	2 区	混土貝層
100	A トレンチ	1 区		混貝土層	90	B トレンチ	3 区	混土貝層
91	A トレンチ	2 区		混貝土層	98	B トレンチ	3 区	混土貝層
140	A トレンチ	2～4 区		混貝土層	148	B トレンチ	3 区	混土貝層
76	A トレンチ	4 区		混貝土層	156	B トレンチ	3 区	混土貝層
94	A トレンチ	11 区		混貝土層	64	B トレンチ	4 区	混土貝層
161	A トレンチ	11 区		混貝土層	150	B トレンチ	4 区	混土貝層
121	A トレンチ	不明		混貝土層	154	B トレンチ	4 区	混土貝層
92	B トレンチ	不明		混貝土層	40	B トレンチ	5 区	混土貝層
60	C トレンチ	不明		混貝土層	66	B トレンチ	7 区	混土貝層
130	C トレンチ	不明		混貝土層	71	B トレンチ	7 区	混土貝層
151	D トレンチ	4 区		混貝土層	102	B トレンチ	7 区	混土貝層
118	E トレンチ	1 区		混貝土層	149	B トレンチ	7 区	混土貝層
128	E トレンチ	不明		混貝土層	157	B トレンチ	7 区	混土貝層
134	E トレンチ	不明		混貝土層	20	B トレンチ	9 区	混土貝層
126	G トレンチ	不明		混貝土層	26	B トレンチ	9 区	混土貝層
79	H トレンチ	3 区		混貝土層	41	B トレンチ	9 区	混土貝層
138	H トレンチ	3 区		混貝土層	43	B トレンチ	9 区	混土貝層
158	H トレンチ	4～5 区		混貝土層	50	B トレンチ	9 区	混土貝層
159	H トレンチ	4～5 区		混貝土層	62	B トレンチ	9 区	混土貝層
22	J トレンチ	3 区		混貝土層	63	B トレンチ	9 区	混土貝層
27	J トレンチ	5 区		混貝土層	65	B トレンチ	9 区	混土貝層
95	J トレンチ	4 区	混貝土層	68	B トレンチ	9 区	混土貝層	
13	J トレンチ	4 区	混貝土層	73	B トレンチ	9 区	混土貝層	
19	J トレンチ	4 区	混貝土層	144	B トレンチ	9 区	混土貝層	
34	J トレンチ	3 区	混貝土層	11	B トレンチ	10 区	混土貝層	
37	J トレンチ	4 区	混貝土層	48	B トレンチ	不明	混土貝層	
14	J トレンチ	不明	第二混貝土層	78	B トレンチ	不明	混土貝層	
2	B トレンチ	9 区	下部混貝土層	82	B トレンチ	不明	混土貝層	
23	F トレンチ	1 区	下部混貝土層	83	B トレンチ	不明	混土貝層	
混土貝層				108	B トレンチ	不明	混土貝層	
番号	トレンチ	区	層位	122	B トレンチ	不明	混土貝層	
85	A トレンチ	2 区	混土貝層	127	B トレンチ	不明	混土貝層	
31	A トレンチ	3 区	混土貝層	142	B トレンチ	不明	混土貝層	
112	A トレンチ	3 区	混土貝層	147	B トレンチ	不明	混土貝層	
29	A トレンチ	4 区	混土貝層	44	C トレンチ	不明	混土貝層	
52	A トレンチ	4 区	混土貝層	49	C トレンチ	不明	混土貝層	
54	A トレンチ	4 区	混土貝層	133	C トレンチ	不明	混土貝層	
77	A トレンチ	5 区	混土貝層	139	E トレンチ	1 区	混土貝層	
141	A トレンチ	5 区	混土貝層	117	E トレンチ	2 区	混土貝層	
30	A トレンチ	5～6 区	混土貝層	10	E トレンチ	3 区	混土貝層	
81	A トレンチ	5～6 区	混土貝層	57	E トレンチ	3 区	混土貝層	
132	A トレンチ	5～6 区	混土貝層	153	E トレンチ	3 区	混土貝層	
106	A トレンチ	6～7 区	混土貝層	124	E トレンチ	拡張区	混土貝層	
47	A トレンチ	8 区	混土貝層	9	E トレンチ	不明	混土貝層	
70	A トレンチ	8 区	混土貝層	72	E トレンチ	不明	混土貝層	
51	A トレンチ	9 区	混土貝層	120	E トレンチ	不明	混土貝層	
1	A トレンチ	11 区	混土貝層	136	E トレンチ	不明	混土貝層	
103	A トレンチ	不明	混土貝層	12	H トレンチ	3 区	混土貝層	
55	B トレンチ	1 区	混土貝層	46	H トレンチ	1 区	混土貝層	
86	B トレンチ	1 区	混土貝層	87	H トレンチ	3 区	混土貝層	
25	B トレンチ	1・2 区	混土貝層	111	D トレンチ	1～3 区	下部混土貝層	
8	B トレンチ	1・7 区	混土貝層	129	A トレンチ	8 区	混土貝層下直下	
33	B トレンチ	2 区	混土貝層					
				貝層下土層				
				番号	トレンチ	区	層位	
				125	A トレンチ	4 区	貝層下土層	
				113	A トレンチ	5 区	貝層下黒色土層	
				45	B トレンチ	不明	地山	
				107	B トレンチ	不明	地山	
				110	B トレンチ	不明	地山	
				137	E トレンチ	3 区	褐色土層	
				3	H トレンチ	不明	貝層下土層	
				4	H トレンチ	不明	貝層下土層	
				119	H トレンチ	3 区	貝層下土層	
				表土層・層位不明・表採				
				番号	トレンチ	区	層位	
				105	A トレンチ	10 区	表土層	
				89	J トレンチ	3 区	表土層	
				38	B トレンチ	5 区	不明	
				42	B トレンチ	5 区	不明	
				162	B トレンチ	5 区	不明	
				39	B トレンチ	不明	不明	
				58	B トレンチ	拡張区	不明	
				67	B トレンチ	不明	不明	
				93	B トレンチ	拡張区	不明	
				143	B トレンチ	不明	不明	
				155	B トレンチ	拡張区	不明	
				18	C トレンチ	拡張区	不明	
				69	C トレンチ	拡張区	不明	
				88	C トレンチ	拡張区	不明	
				5	D トレンチ	不明	不明	
				24	E トレンチ	拡張区	不明	
				36	E トレンチ	拡張区	不明	
				75	E トレンチ	拡張区	不明	
				135	E トレンチ	拡張区	不明	
				28	F トレンチ	3 区	不明	
				6	G トレンチ	拡張区	不明	
				7	G トレンチ	拡張区	不明	
				99	G トレンチ	拡張区	不明	
				114	I トレンチ	拡張区	不明	
				115	I トレンチ	拡張区	不明	
				15	J トレンチ	拡張区	不明	
				16	不明	—	不明	
				17	不明	—	不明	
				21	不明	—	不明	
				53	不明	—	不明	
				56	不明	—	不明	
				74	不明	—	不明	
				84	不明	—	不明	
				97	不明	—	不明	
				104	不明	—	不明	
				123	不明	—	不明	
				160	不明	—	不明	
				32	表面採集	—	—	
				35	表面採集	—	—	
				61	表面採集	—	—	

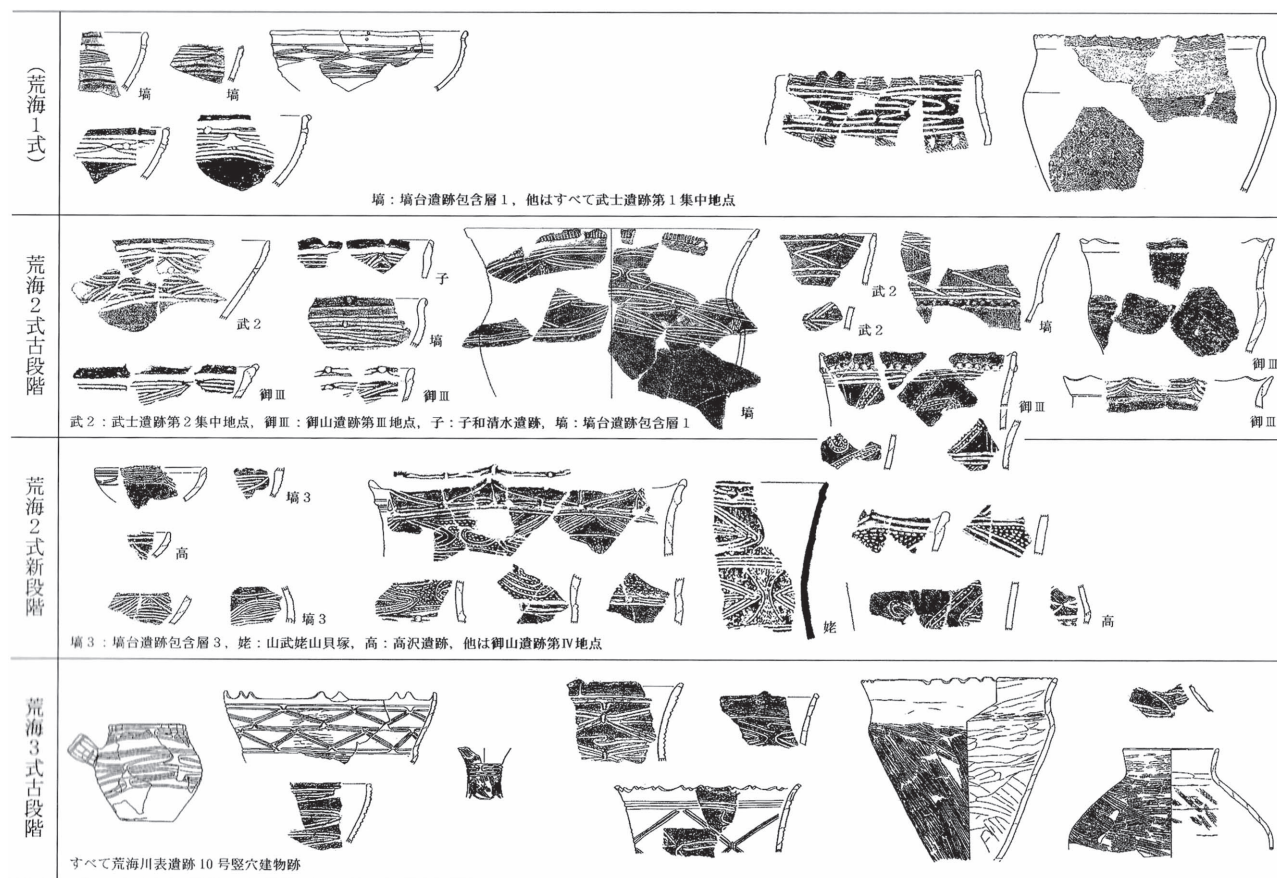


図236 荒海1式～3式の編年 [渡辺2007より]

発掘の資料も荒海1式の中で考えなくてはならない。

西村正衛は利根川流域の貝塚研究の集大成のなかで荒海貝塚第1・2次調査を総括し、縄文時代晩期終末の第6群土器をあらたに分類した [西村1984]。

これまで一括していた千網式や杉田Ⅲ式に対比される土器 (図227-15) と大洞A式に対比される工字文、匹字文、平行線文をもった土器 (図228-28・45) をⅦ類とⅧ類に区分した。

第Ⅸ類は大洞A'式に対比される文様をもった土器である (図230-68)。整わない三角連繫文のa種 (図230-61) →匹字文を中心に平行線の数の多い文様のb種 (図230-56) →平行線を減じたc種 (図230-62) →匹字文の変動に伴い菱形文を形成するようになる彫刻手法の強いd種 (図229-74) という変遷を示した [西村1984: 597-601]。

第Ⅹ類は浮線網状文、工字文、三角連繫文の疑似的文様をもつ土器である (図231-81・86・92・93)。三角連繫文が平行線の多い直線的描写のもの→平行線は多いが描写荷崩れがうかがえるもの→平行線が少なく単線に省略されるものという変化を認めている [西村1984: 604]。

第Ⅺ類は組成土器であり、a種: 捺糸文、b種: ハケ目・櫛目文、c種: 貝殻条痕文、d種: 無文、e種: 壺という分類は一貫している。

これまでの分類体系と基本的にはかわらないが、浮線網状文の系統と大洞A式の工字文・匹字文・平行線文の系統を第Ⅶ類と第Ⅷ類に区分した点と、第Ⅸ類と第Ⅹ類の変化の過程をより詳細に明ら

かにした点に1984年論文の意義があった。

西村の荒海式の捉え方、すなわち山内の発案による大洞A・A'式に対比する編年の位置づけを踏襲し、細別したのが鈴木正博である。鈴木は荒海式の菱形連繫文土器を分析し、荒海1式=雑書文の段階=大洞A2式並行、荒海2式=3本を1単位とする段階=大洞A'1式、荒海3式=2本を1単位とする段階=大洞A'2式、荒海4式=単線に統一される段階=福浦島下層(古)段階と並べ、荒海2式は荒海貝塚に、荒海3式は荒海貝塚のほか千葉県成田市台方花輪貝塚、千葉県佐倉市天神前遺跡に、荒海4式は荒海貝塚のほか茨城県稲敷市殿内遺跡第1号小堅穴に、それぞれ顕著であるとした。また、変形工字文の変化は、荒海貝塚→女方遺跡→福島県いわき市一人子遺跡→殿内遺跡と並べ、前3者がそれぞれ荒海2式(単段変形工字文)、荒海3式(複段連続変形工字文)、荒海4式に併行するものとした[鈴木1981:2]。

その後鈴木は浮線網状文を6期に区分した[鈴木1985]。筆者の区分は長野県域の資料にもとづく中沢道彦の区分とほぼ共通した5期区分であり、女鳥羽川式→離山式→氷I式古段階→氷I式中段階→氷I式新段階である[中沢1998:5-18]。鈴木は荒海1式は神奈川県横浜市杉田貝塚の杉田Ⅲ式5期に併行し、荒海2式が6期に併行する。われわれの区分との対応関係は以下のとおりである。

鈴木杉田遺跡編年	1期——2・3・4期——5期——6期
中沢・設楽浮線網状文土器編年	1期——2期——3・4期——5期

荒海1式はいわゆる荒海J型三分岐浮線文を指標とする。それは群馬県高崎市三ノ倉落合遺跡で、われわれのいう3期の氷I式古段階の資料中に認められる。4期の氷I式中段階の土器は含まない。3期に口外帯と口縁部文様帯が明確に分離し、4期で頸部無文帯が発達する。発達した頸部無文帯は氷I式古段階には未見であるから、頸部無文帯が発達した千葉県成田市龍正院貝塚の資料は鈴木は荒海1式に相当する5期のうちでも後半に位置付けられ、荒海貝塚Jトレンチ→龍正院貝塚と編年される。すなわち、鈴木は荒海1式は細別ないし再編成される可能性が高いのであり、その点を後に述べることにしたい。

**荒海貝塚以外の資料による荒海式土器の検討** 渡辺修一は千葉県域の荒海式土器を出土した遺跡のうち良好な一括資料ないし比較的単純な時期の資料を出土した遺跡として取り上げ、荒海1式→荒海3式古段階までを、荒海1式(千葉県市原市武士遺跡第1集中地点、多古町塙台遺跡包含層1)→荒海2式古段階(武士遺跡第2集中地点、千葉県四街道市御山跡第Ⅲ地点、千葉県多古町塙台遺跡包含層1など)→荒海2式新段階(塙台遺跡包含層3、御山遺跡第Ⅳ地点など)→荒海3式古段階(成田市荒海川表遺跡10号堅穴)と並べた(図236)[渡辺2007:18-19]。浮線網状文の浅鉢は荒海1式で健在であったのが荒海2式古・新段階で衰退して沈線化し、荒海3式で消滅する。沈線化の過程は西関東地方で谷口肇により、東京都新島本村の田原遺跡と、神奈川県大井町矢頭遺跡の土器によって田原1段階→矢頭段階→田原2段階と設定された変遷[谷口2003]と一致している。

矢頭段階の文様は、浮線文から沈線文への過渡的段階である。房総地方では武士遺跡第2集中地点出土土器[高柳1996]が、比較的まとまった様相をみせ、この段階に相当する[渡辺2007:3]。武士遺跡第2集中地点の浅鉢形土器は、口縁部に浮線網状文を描き、その下に沈線によって弧線文を対向させている。甕形土器は、頸部無文部に2~3条の「く」字形の沈線を交互に加えが重菱形



文を特徴とする。そのほか、沈線工字文の浅鉢や列点文、矢羽根状沈線文、平行沈線文からなる甕がある。粗製土器の大半は細密条痕調整の深鉢と甕であり、条痕は緻密で整っている。撚糸文はわずかに半精製土器の胴部に認められる程度である。

さらに渡辺はこれを御山遺跡第Ⅲ地点出土土器に併行させている〔渡辺2007：8〕。御山遺跡では四つの土器集中地点から晩期終末の土器が出土し、第Ⅰ・Ⅱ地点の御山（古）段階→第Ⅲ地点の御山（中）段階→第Ⅳ地点の御山（新）段階という変遷が組まれた〔渡辺1994：173〕。

御山遺跡第Ⅰ・Ⅱ地点出土土器は、浮線網状文の浅鉢と折り返し口縁で口縁部と胴部に撚糸文をもつ粗製深鉢・甕が主体をなす。それに沈線工字文の壺や浅鉢、胴屈曲部に沈線文と突起をもつ甕、細密条痕の甕が加わる。雑書文系の半精製土器は、まだ出現していない。撚糸文と細密条痕の比率は約2：1であり、細密条痕は密で整っている。

御山遺跡第Ⅲ地点出土土器は、沈線化しつつも、まだ浮き彫りの要素が強く、沈線も太い浮線網状文系の浅鉢、雑書文や羽状沈線文を施した半精製の甕、折り返し口縁や単純な口縁で細密条痕の甕・深鉢を主体とする。浮線網状文系の浅鉢の文様は、大洞A2式の匹字文の流れも汲んでいる。半精製土器では、沈線間などに列点をもつものを特徴とする。半精製、粗製土器の撚糸文の退潮が著しい。なお、この地点には荒海2式以降の変形工字文の甕や弥生中期の壺に典型的な三角区画で列点文をもつ深鉢の破片も混じっている。

御山遺跡第Ⅳ地点出土土器は、完全に沈線化した浮線網状文系の浅鉢、頸部に3条の沈線で菱形区画文を描いた雑書文系の半精製の甕で構成される。半精製の甕では、列点文が沈線間ではなく、区画内に広がっている。浅鉢、甕ともに、第Ⅲ地点からの変化が認められる。

これらはおもに中部高地地方の浮線網状文土器編年との併行関係から、第Ⅰ・Ⅱ地点の御山（古）段階が氷Ⅰ式の古段階に、第Ⅲ地点の御山（中）段階が氷Ⅰ式新段階ないしその直後に位置づけられ、第Ⅳ地点の御山（新）段階は弥生前期末から中期初頭に位置づけられる可能性を考えた〔渡辺1994：175-176〕。渡辺はその後、御山（古）段階を荒海1式、御山（中）段階を荒海2式古段階に併行させ、御山（新）段階については荒海2式新段階に併行すると考えを変更した〔渡辺2007：16-19〕。鈴木正博の荒海式土器編年との相違は、武士遺跡第2集中地点の荒海2式古段階のように、雑書文に2条沈線による菱形文が普及していることから、雑書文が3条→2条と単純に変遷はしないこと〔渡辺2007：17〕、御山遺跡第Ⅲ・Ⅳ地点のように、荒海2式には鈴木氏の荒海2式の変形工字文が認められず、それは荒海3式の荒海川表遺跡の段階になってはじめてあらわれるとした点〔渡辺2007：19〕などである。

渡辺は荒海川表遺跡10号竪穴建物の出土土器を荒海3式古段階の一括資料と捉えた。荒海3式の特徴として、浮線文系浅鉢の消滅と粗製大型壺形土器の出現という二大画期に加えて、各地で変形工字文が出現すること、雑書文系菱形区画と稲妻状文の融合で新しいタイプの菱形連繫文が出現することなどをあげ、縄文晩期土器組成の変革の終了と弥生土器の成立をここに求めている〔渡辺2007：19〕。

## （2）1989・1990年調査荒海貝塚地点別の土器の特徴

**地点別資料の重要性** 本調査で検出された縄文晩期終末の土器群は、地点別に様相が異なってい

表 77 荒海貝塚出土の千網式・荒海式土器類型別個体数 (1)

	粗製土器（深鉢・甕）													半精製土器 （深鉢・甕）		精製土器				合計
	撚糸文			細密条痕			二枚貝条痕			無文調整不明		粗製土器小計		半精製土器小計		鉢	壺	器種不明	精製土器小計	
	口縁部	胴部・底部	小計	口縁部	胴部・底部	小計	口縁部	胴部	小計	口縁部	小計		口縁部	胴部		口縁部	口縁部	胴部		
18I 区攪乱	13	51	64	2	16	18	0	0	0	2	2	84	0	0	0	0	0	0	0	84
18I 区貝層	0	10	10	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	1	1	0	0	1	1	12
小計	13	61	74	2	16	18	0	0	0	2	2	94	0	1	1	0	0	1	1	96
I-1 区貝層上	1	15	16	2	27	29	1	6	7	0	0	52	0	2	2	4	1	0	5	59
I-1 区貝層中	0	7	7	1	44	45	0	1	1	0	0	53	2	2	4	1	0	0	1	58
I-1 区貝層下	0	1	1	0	3	3	0	0	0	0	0	4	1	0	1	0	1	0	1	6
小計	1	23	24	3	74	77	1	7	8	0	0	109	3	4	7	5	2	0	7	123
II-1 区貝層上	0	6	6	3	21	24	0	8	8	0	0	38	0	0	0	2	0	0	2	40
II-1 区貝層中	0	13	13	15	46	61	2	20	22	0	0	96	4	1	5	0	0	1	1	102
II-1 区貝層下	0	1	1	0	3	3	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	4
小計	0	20	20	18	70	88	2	28	30	0	0	138	4	1	5	2	0	1	3	146
I-2 区貝層上	3	26	29	10	104	114	0	7	7	2	2	152	0	0	0	0	0	0	0	152
I-2 区貝層中	2	18	20	32	99	131	0	0	0	2	2	153	2	6	8	2	0	0	2	163
I-2 区貝層下	1	16	17	3	11	14	0	0	0	0	0	31	0	0	0	1	0	0	1	32
小計	6	60	66	45	214	259	0	7	7	4	4	336	2	6	8	3	0	0	3	347
I-3 区貝層上	1	12	13	14	44	58	2	0	2	3	3	76	2	1	3	0	0	0	0	79
I-3 区貝層中	2	9	11	8	67	75	0	1	1	6	6	93	2	0	2	1	1	2	4	99
I-3 区貝層下	1	4	5	1	6	7	0	0	0	0	0	12	0	1	1	0	0	0	0	13
小計	4	25	29	23	117	140	2	1	3	9	9	181	4	2	6	1	1	2	4	191
I-2・I-3 区攪乱	0	8	8	5	40	45	0	0	0	0	0	53	0	0	0	1	1	0	2	55
小計	0	8	8	5	40	45	0	0	0	0	0	53	0	0	0	1	1	0	2	55
II-2 区貝層上	3	12	15	0	49	49	0	4	4	1	1	69	0	6	6	0	0	0	0	75
II-2 区貝層中	3	23	26	2	67	69	0	16	16	0	0	111	0	3	3	1	0	1	2	116
II-2 区貝層下	0	3	3	0	1	1	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	4
小計	6	38	44	2	117	119	0	20	20	1	1	184	0	9	9	1	0	1	2	195
合計	30	235	265	98	648	746	5	63	68	16	16	1095	13	23	36	13	4	5	22	1153

表 78 荒海貝塚出土の千網式・荒海式土器類型別個体数 (2)

	撚糸文										細密条痕														二枚貝条痕		総計		
	深鉢					甕					撚糸文合計	深鉢					甕					細密条痕合計	深鉢		甕		二枚貝条痕合計		
	A1	A2	A3	B	C	A1	A2	A3	B	A1		A2	A3	B	C	A1	A2	A3	A4	B1	B2		C1	C2	C	C2			
I-1 区貝層上	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0	1	1	3	
I-1 区貝層中	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	
小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	1	0	4	0	1	1	5		
II-1 区貝層上	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2		
II-1 区貝層中	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	4	0	0	1	0	0	0	1	7	14	0	0	14		
小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	5	0	0	1	0	0	0	1	7	16	0	0	0	16	
I-2 区貝層上	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	1	0	1	2	0	0	0	1	0	5	0	0	7	
I-2 区貝層中	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1	2	1	2	0	1	2	0	1	1	2	0	14	0	0	15		
I-2 区貝層下	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	3	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	6	
小計	1	1	2	0	1	0	1	0	0	0	6	2	1	4	1	3	0	2	4	0	1	1	3	0	22	0	0	28	
I-3 区貝層上	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	3	4	0	2	0	0	0	2	0	12	1	1	2	14
I-3 区貝層中	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	2	0	0	1	0	0	3	0	7	0	0	0	8	
I-3 区貝層下	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	2	
小計	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	1	1	0	0	3	6	0	2	1	0	0	6	0	20	1	1	2	24
I-2・I-3 区攪乱	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	3	0	0	0	3	
小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	3	0	0	0	3	
II-2 区貝層上	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
II-2 区貝層中	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
小計	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
合計	2	2	3	0	1	2	1	0	0	11	4	2	5	2	12	7	3	8	1	1	1	12	7	65	1	2	3	79	

た。18I 区と I-2・I-3 区であり、II-1 区もそれと多少異なる点があった。

荒海貝塚の出土土器が、地点によって年代や様相が異なることは、前項で述べたようにすでに早稲田大学の発掘調査で明らかにされていた事実である。荒海 2~4 式土器が谷にかかった斜面の A・B トレンチから主に出土したのに対して、台地のへりの S トレンチでは荒海 1 式土器が存在してお



り、さらに斜面から平坦面に移行したFトレンチで安行1式の貝層が主体となる、という地点を異にする主体貝層の年代の差が、今回の土器の編年の位置づけを考える上で重要になる。

この、台地の中央から斜面部にかけて徐々に年代が新しくなる傾向は、今回の調査でも明らかである。すなわち、南北トレンチでもっともローム層が高い部分に位置する18J・K・L区では加曾利B1～B3式を中心とし、南接する18M区では曾谷～安行2式が増加し、18N～T区では千網式～荒海式が出現するようになる。一方、北接する18I区には撚糸文と浮線網状文土器を主体とする貝層が形成され、さらに北の中央トレンチI-2・3区では細密条痕文を主体とするが浮線網状文は見当たらない貝層が形成されていた。それに北接する若干様相の異なる土器を含むII-1区は、早稲田大学のA・Bトレンチに近い。したがって、まずこの地区の晩期終末のなかでもっとも古い18I区出土土器とそれと様相の異なるI-2・3区出土土器の比較が問題となり、次にII-1区出土土器との比較が問題になる。

**18I区出土土器の特徴と編年の位置づけ** 18I区出土土器の特徴的なものを図237に配列した。18I区の主体的な土器群の特徴をまとめれば以下のとおりである。

- ① 精製土器：浅鉢は、氷I式古段階に典型的な三分岐浮線文であり、いわゆる荒海J型三分岐浮線文を伴う（図237-1・6／図119-1690・1691）。一方、氷I式中段階に典型的な頸部無文帯の幅が広がったものは含まない。大洞A式の流れをくむ工字文の壺形土器や鉢を伴う（図237-4・5／図119-1686・1687）。
- ② 半精製土器：胴屈曲部やおそらく口縁部に平行沈線をもち、胴屈曲部に突起を加えた甕であり、雑書文や列点文はほとんどみられない（図237-2）。
- ③ 粗製土器：細密条痕文の破片が18個（495g）に対して撚糸文の破片が74個（3405g）であり、細密条痕文は緻密で整ったものが伴うが量は少ない。破片の数でおよそ8割、重量にしておよそ9割弱が撚糸文施文である（表77）。折り返し口縁の甕A1や深鉢が主体を占めるが（表78）、これらに口縁端部をそぎ落とすように面取りする手法や、部分的に押捺を加えたり、小突起を施すなど荒海式土器に特徴的な要素はまだ顕著ではなく、千網式土器の特徴が明瞭である。

これらに氷I式中段階の浮線網状文が伴わないことからすれば、同時期の18I区出土土器の主体は氷I式古段階に併行すると考えられる。荒海式土器に典型的な雑書文<sup>(3)</sup>につながる要素は、文様や整形・調整などの特徴のなかにまだ認めることはできない。胴屈曲部に平行沈線と突起をもつ半精製土器が雑書文の土器の母体になるのだろうが、この土器は千網式の標識遺跡である群馬県千網谷戸遺跡でも検出されている。

このような特徴からすると、18I区出土土器の主体は千網式土器の地方型式と位置づけるのが妥当であろう。細密条痕の比率が低いのが特徴だが、1点の大型破片（図237-9／図122-1754）に注意する必要がある。胴部上位に鈴木正博による荒海1式である5条の沈線をめぐらした甕形土器である。沈線の条数が多い土器は通常撚糸文で構成されるので、細密条痕は新しい傾向ということができ、この土器も貝層上面から出土したので撚糸文と同じ時期か不安もあるが、細密条痕が卓越する地方色として同時期に置いておきたい。

この土器群ともっとも近いまとめた資料は、御山遺跡第I・II地点の土器である。鈴木<sup>(3)</sup>の編年に当てはめれば千網5式である〔鈴木1985〕。18I区出土浮線網状文土器がすべて三分岐浮線文の一

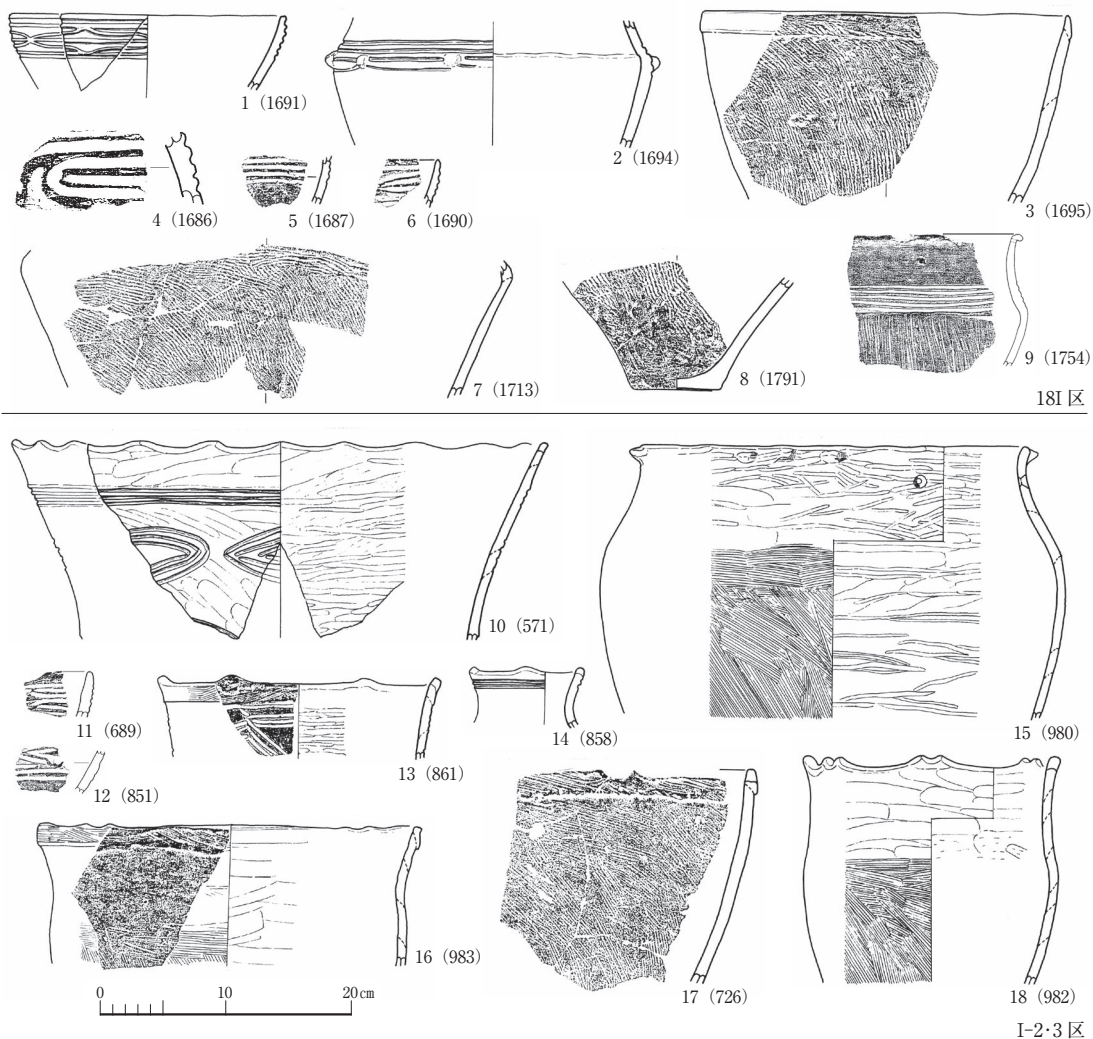


図 237 荒海貝塚出土土器の地点による違い（括弧内は挿図の土器番号）

括性の高いまとまりであることは、先に指摘した龍正院貝塚出土土器よりも古いことを物語っており、細密条痕文に対する撚糸文の割合の高さもそれを補強している。したがって、荒海J型三分岐浮線文を荒海1式とする編年は、再考の余地がある。しかし荒海1式から龍正院貝塚資料よりも古い三分岐浮線文を外すとしても、まだ荒海1式は細分される可能性をもつ。それをI-2・3区出土土器から明らかにしたい。

**I-2・3区出土土器の特徴と編年の位置づけ** I-2・3区出土の主要な土器の特徴は以下のとおりである。

- ① 精製土器：浮線網状文がまったくといってよいほどないことがまず注意できる。貝層下の出土であるが、沈線化した浮線網状文の鉢が1点ある（図237-11／図75-689）。渡辺が荒海2式古段階に比定する御山遺跡第Ⅲ地点出土土器と共通し、谷口の矢頭段階に相当する。東北地方の大洞A2式のいわゆる変形匹字文をもつ鉢が貝層から出土した（図237-12／図79-851）。変形匹字文は近年の分析によると大洞A2式～大洞A'式に伴うとされるが、この個体は直線化と

委縮が著しいので大洞 A' 式に比定できよう。852 も地方化した大洞 A' 式であり、いずれも搬入品である。

- ② 半精製土器：頸部を無文としそこに菱形文を描くものが伴う（図 237-10／図 71-571）。沈線文は 3 条 1 単位であり鈴木 of 荒海 2 式の典型であるが、荒海 1 式に近い。沈線間に米粒状の列点を加えたものや細かな刺突をもつものもある（図 76-738・739, 図 68-429）。これは渡辺の荒海 2 式段階で出現する手法であり、御山遺跡第Ⅲ地点の資料に近い。また、沈線を断続的に区切る手法や、沈線のなかにヘラの止め痕の顕著なものも認められる（図 76-738・739）。

- ③ 粗製土器：撚糸文の破片が 103 片（1830g）に対して細密条痕文の破片が 444 片（9860g）と破片数でおよそ 8 割、重量でおよそ 8 割 5 分と 18I 区と逆転する（表 77）。細密条痕文は大半が繊細で緻密である。二枚貝による条痕文の破片はわずか 10 片と粗製土器文様全体の 2% にも満たず（表 77）、それもほとんどが貝層の上に堆積した層からの出土である。甕の口縁部は A1, A3 のほか C1 が大半で、口縁部が大きく外反する A4 や B2, C2 はごくわずかである（表 78）。甕の口縁部は端部を切ったように面取りされるものが目立ち（図 82-982）、波状口縁に小突起が付けられたものが多いが（図 68-452・453, 図 75-726, 図 76-744・745, 図 82-982, 図 88-1178）、連続した押捺でさざ波状をなすものはわずかである（図 71-573, 図 79-875・876）。図 68-451, 図 79-879 は口縁に大きな突起が設けられており、氷 I 式新段階の長野県松本市石行遺跡の粗製土器の特徴と共通する。

粗製土器の口縁部の特徴と半精製土器の雑書文は、この土器群が荒海式であることを示す。土器の特徴から、単純な時期の資料とみてよい。変形工字文は一切なく、二枚貝条痕文がきわめて少ないことからすれば鈴木の荒海 2 式以前といえる。全体的な特徴から、御山遺跡第Ⅲ地点ともっとも近く、渡辺の荒海 2 式古段階に比定できる。浮線網状文が極端に少なくなり沈線化しつつある時期で、その段階の石行遺跡の土器と共通する特徴をもつ土器も、編年の位置づけを支持している。大洞 A' 式の古い型式が伴うことも矛盾しない。したがって、I-2・3 区出土土器の主体は氷 I 式新段階－大洞 A' 式古段階に併行する。浮線網状文の末端に位置付けられることや、鈴木の荒海式土器編年を尊重し、荒海 1 式の範疇で理解しておきたい。

18I 区出土土器は氷 I 式古段階に相当するから、今回の出土資料には氷 I 式中段階が欠落していることになる。台地中央から斜面部に向かって貝層の時期が新しくなる傾向からすれば、18I 区と I-2・3 区の間地点にその段階の資料を含んだ貝層が存在している可能性が高い。そこには早稲田大学の N トレンチや S トレンチが位置しており、N・S トレンチの土器群の実態が問題になるであろう。

I-2・3 区出土土器は渡辺の荒海 2 式古段階だが、鈴木の荒海 1 式を細別して荒海 1 式新段階に位置付けた。荒海 1 式古段階の実態を含めた荒海 1 式の細別は、N・S トレンチの検討を含めて今後の課題である。

## Ⅱ－1 区出土土器の編年的特徴 Ⅱ-1 区出土土器には浮線網状文や変形工字文はない。

半精製土器には I-2・3 区と同様、3 条 1 単位の雑書文や断続沈線文、列点文などがある。以上の特徴は I-2・3 区とほぼ同じであり、荒海 1 式の範疇に収まることを示す。細密条痕文に整った繊細なものが多いのも、共通する傾向である。しかし、粗製土器文様 138 片（1775g）のうち二枚



貝条痕文破片が30片(390g)と破片数重量ともに2割強を占め、そのほとんどが貝層中からの出土である(表77)。それに応じるかのように、口縁部の形態も深鉢ではC種、甕ではC2種が主体を占めるようになる(表78)。甕のC2種には大振りの波状口縁が目立つ。これは、I-2・3区ではみられなかった傾向である。

粗製土器の口縁の外反度が強くなり、波状口縁が大振りになるのは、氷Ⅰ式から氷Ⅱ式への変化が想起される。氷Ⅱ式と併行か否かは変形工字文が伴わないので議論することはできないが、Ⅱ-1区が荒海2式の母体である早稲田大学A・Bトレンチにより近いこととからすれば、I-2・3区からの新たな動向として注目しなくてはならない。

**まとめ** 以上、鈴木や渡辺の荒海式土器に対する見解をもとに、今回の調査による出土土器を検討した結果、18I区出土土器が千網式最終末に、I-2・3区出土土器が荒海1式新段階に、Ⅱ-1区出土土器がそれに後続する荒海2式以前ないし氷Ⅱ式併行の破片を多く含む土器群にそれぞれ比定された。今回の調査では荒海1式古段階が欠落しているが、大局的にまとめると標高の高い台地から低い斜面部に向かって、18I区(千網式最終末)→早稲田大学Sトレンチ(荒海1式古段階)→I-2・3区→Ⅱ-1区(荒海1式新段階)→早稲田大学A・Bトレンチ(荒海2式)と貝層の移動が想定された。

荒海2式～3式は、土器組成の変化の点で大きな画期をなす。西関東西方では神奈川県大井町中屋敷遺跡が荒海3式期に成立し、陸耕を主体とする農耕を始めた。その土器群には大型の粗製土器の壺が組み合わさっており、荒海式でもその影響はうかがえる。しかし、荒海式土器はおもな分布圏から外に出ていかない。むしろその前段階の浮線網状文土器の方が、広域にわたって類似した精製土器が展開し、交流は活発であった。

(設楽)

## 2 石器・石製品

### (1) はじめに

今回の発掘調査は、その面積がせまかったこともあって、石器の数は少なく、今回の出土品だけで荒海貝塚の傾向を知ることは困難である。そこで、西村正衛らの調査時の出土石器も合わせて考察の対象にしたい。ここでは、石器の組成をみて生業の一端をうかがったあと、いくつかの特徴的な遺物を取りあげることにする。ただし、時期的には後期から晩期末までまたがっており、荒海貝塚の最後の時期に限っての議論は困難である。石材の産地については、299頁でふれておいた。

### (2) 石器の組成

縄文晩期の石器は、敲石4点、砥石2点、石棒小破片1点が出土したにすぎない。

石鏃は縄文後期例が4点出土したが、晩期例は皆無であった。西村の報告でも晩期に属するA地点から無茎凹基式鏃が3点みつかっただけであって、石鏃が少ないのは大きな特徴といえる。

スクレイパーは、摘みをもつ石匙は皆無で、不定型のスクレイパーも確実なものは1点も出土していない。

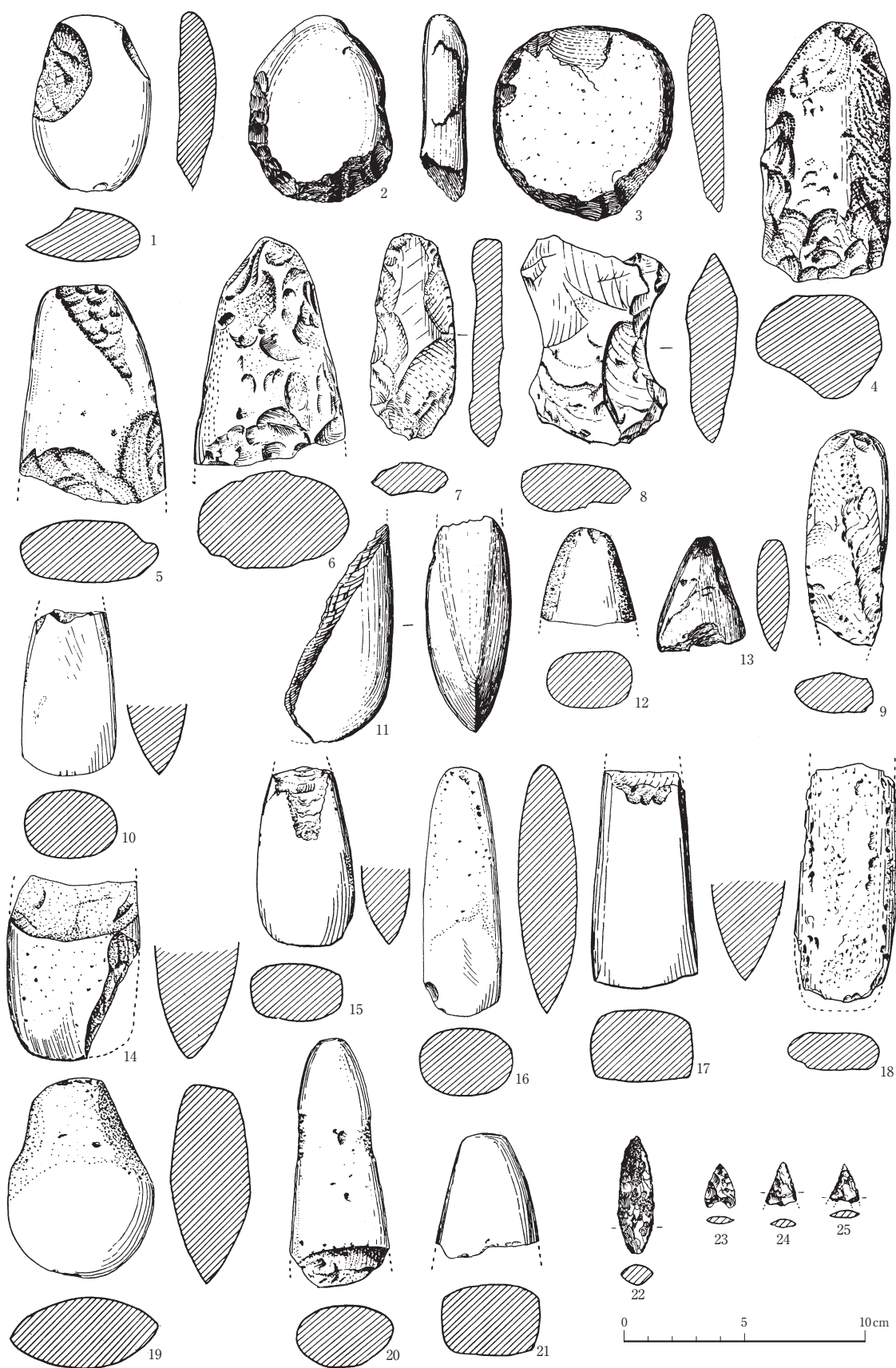


図 238 西村正衛ら発掘の石器 (1) [西村 1984]

1・4～9・23 は縄文後期ないしそれ以前

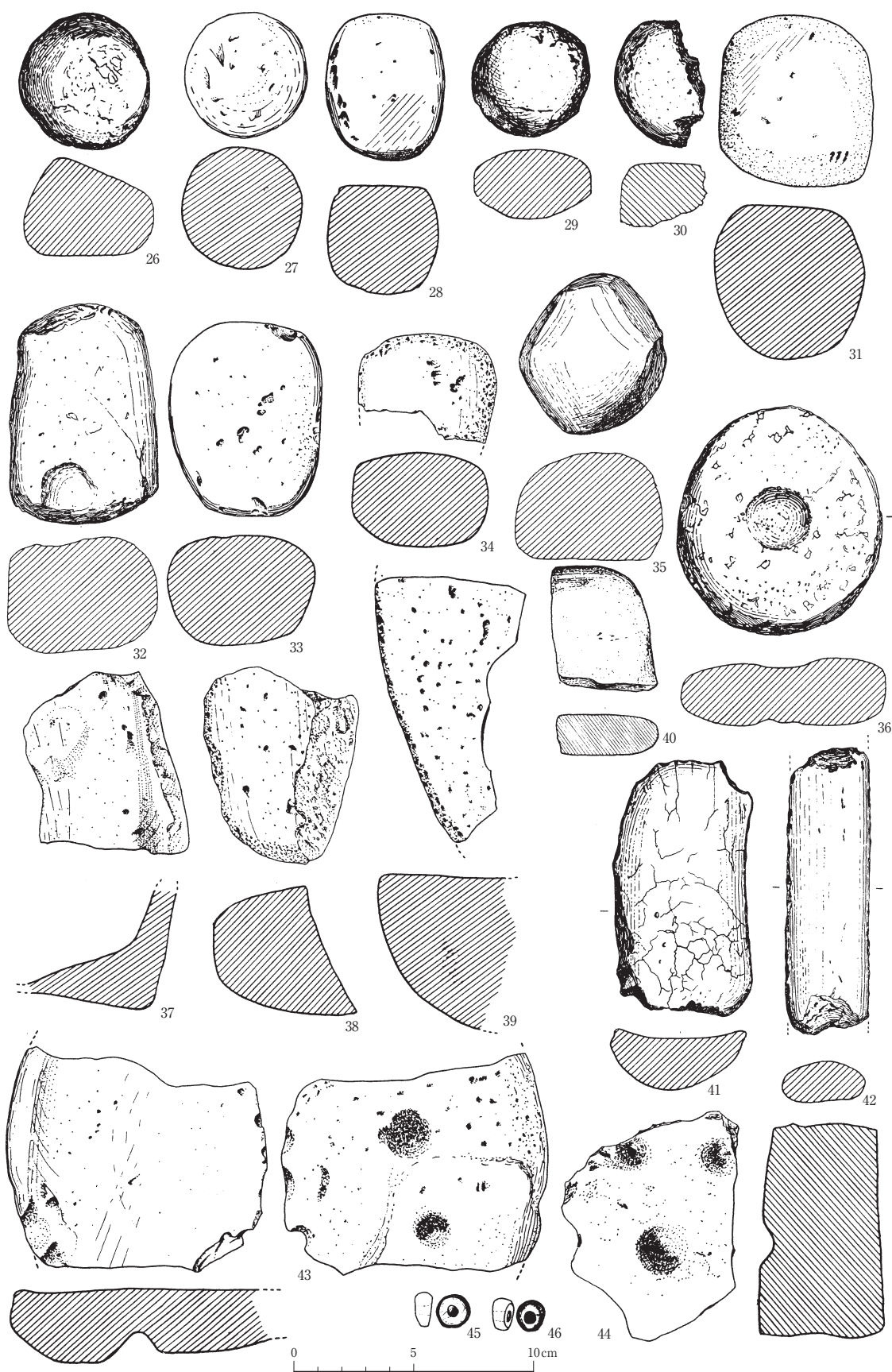


図 239 西村正衛ら発掘の石器 (2) [西村 1984]



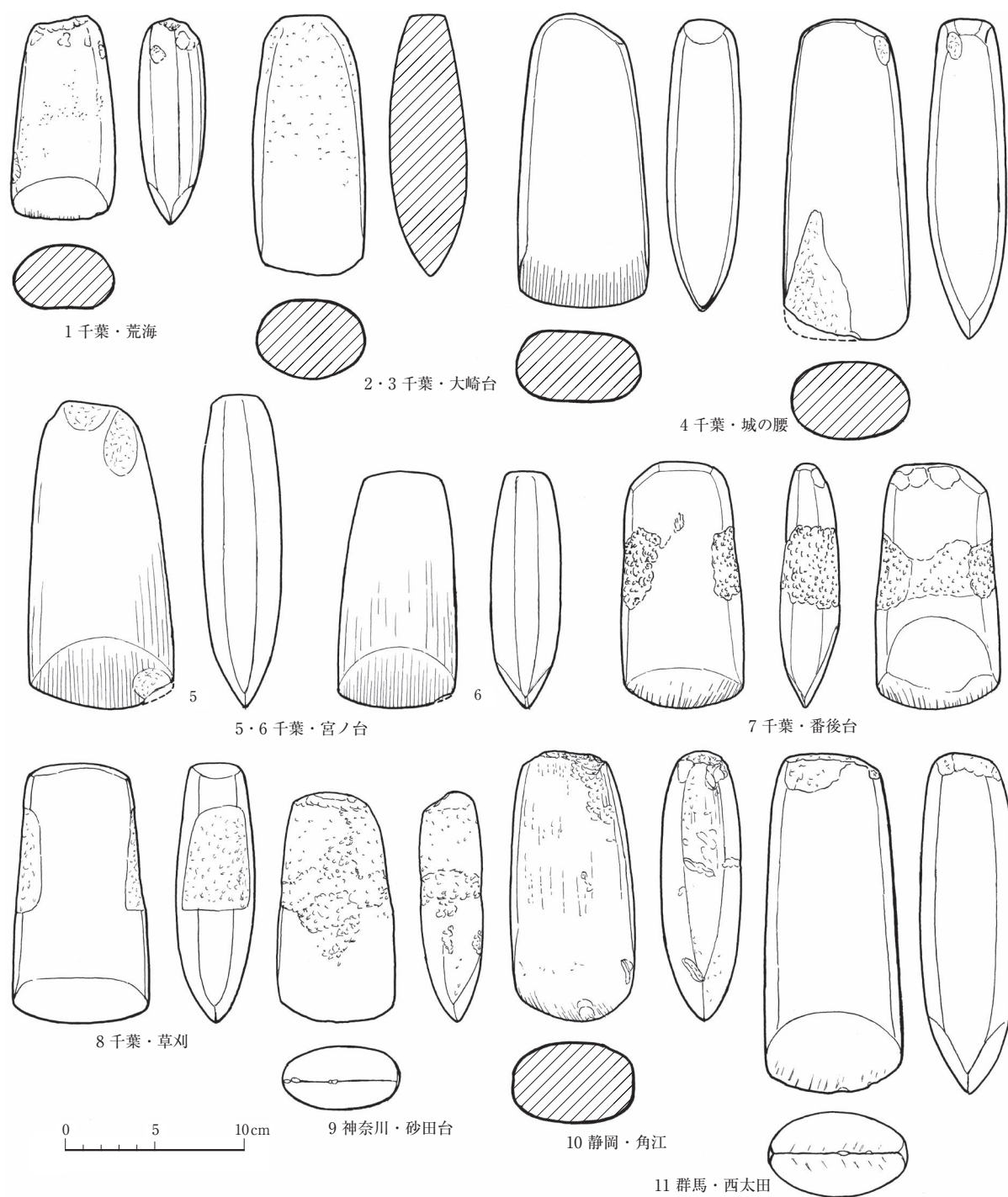


図 240 荒海貝塚表面採集の石斧と関東地方の弥生中期の石斧

磨製石斧は、西村らの発掘では11点出土しており、乳棒状2点、定角式2点、蛤刃2点ほかがあり、比較的多いといえる。砥石の多さもこれと関連しているのであろう。

敲石は石器作りに使ったハンマーが多いようである。磨石はやや多い。石皿は復元すると長さと幅が20cmでいどの小型品ばかりである。打製土掘具（石斧）は少ない。西村らの発掘で出土した時期不明とされる分銅形は古いのであろう。植物質食糧にたいする依存度が高かった否かの判断は

難しい。しかし、石皿が小型品だけであるという特徴は、植物質食糧の大量処理をおこなっていないかつたらしいこと、つまり荒海貝塚の当時の人口はけっして多くはなかったことを示唆しているであろう。

以上、石器の組成から荒海貝塚を残した人々の活動を復元するには数量的な不足を思わざるを得ないけれども、弓矢による狩猟は盛んでなく、植物質食糧の採取も石器からみるかぎり、盛んであったとは言にくい。しかし、農耕と結びつきそうな石器も見いだせなかった。

こうしてみると、荒海貝塚では西村らの発掘時の骨製刺突具の多さがきわだっており、漁労活動の比重が重かったことを考えざるをえないだろう。

### (3) 磨製石斧

荒海貝塚で採集された石器のなかに蛤刃の磨製石斧が1点ある。緑色岩製で、横断面は扁楕円形、長さ11.6cm、幅6.0cm、厚さ3.8cmはけっして大型ではない。その一方、荒海貝塚の縄文晩期の層から発掘された磨製石斧は、横断面がより厚い楕円形、あるいは隅円の長方形で、復元長8～11cm、幅3.2～4.4cmの細長いものが主体で、推定長16cm、同幅8cmの大型品が例外的に1点ふくまれている。関東・中部地方の弥生中期の磨製石斧と比較してみよう（図240）。

千葉県佐倉市大崎台	14.6 × 6.4 × 4.2, 16.4 × 7.4 × 4.0	弥生中期後半 [柿沼ほか1985-1987・1997]
千葉県千葉市城の腰	18.0 × 7.0 × 4.4	弥生中期 [菊池編 1979]
千葉県茂原市宮ノ台	17.6 × 8.1 × 4.4, 13.2 × 6.6 × 4.0	弥生中期後半 [杉原 1967]
千葉県市原市番後台	14.0 × 7.0 × 3.4	弥生中期 [豊田 2003 : 142]
千葉県市原市草刈	14.6 × 7.6 × 4.4	弥生中期後半 [白井・島立編 1994]
神奈川県秦野市砂田台	12.9 × 6.6 × 3.6	弥生中期後半 [宍戸・谷口編 1991]
静岡県浜松市角江	15.2 × 7.0 × 4.6	弥生中期 [中山・小林編 1991]
群馬県伊勢崎市西太田	19.0 × 7.7 × 5.2	弥生中期 [村田編 1983]

いずれも典型的な蛤刃の磨製石斧である。長さ12.9～19.0cm、幅6.4～8.1cm、厚さ3.4～5.2cmで、長さに関しては欠損後に再生することによって短縮している例が知られているので一定していないけれども、幅と厚さは規格的な作りを示しており、その特徴は荒海貝塚出土の1点とほぼ完全に重なる。

以上のように、荒海貝塚でみつかった磨製石斧の1点は、縄文文化の本来的な石器ではなく、弥生文化の所産であると理解する。荒海貝塚出土の他の磨製石斧との違いから荒海貝塚の縄文人が自ら製作したのではなく、弥生人が製作した磨製石斧をなんらかの手段で入手したと考えるのが妥当である。

なお、荒海貝塚からは西村正衛らの調査時に、短い身部に蛤刃の刃部をもつ石斧（長さ9cm）が千網式土器の層からみつまっている（図238-19）。定角式の石斧が多い荒海貝塚では異例であり、関東地方の他の遺跡にも例をみない特異な石斧である。西村正衛はこれを「弥生式への接近がみられる重要な資料」と位置づけた [西村ほか 1965 : 31]。しかし、弥生時代にこれに類する石斧は存在しない。刃部が薄く扁平な特徴だけをとりあげると、むしろ関東地方に特有の有角石器に似ている。

有角石器は西日本の銅戈に起源があるから、時期的には弥生中期初めが上限となるが、千葉県下でのこれまでの出土品は市原市草刈遺跡の弥生中期後半、宮ノ台期の例がもっと古い〔蜂屋 2004 : 588〕。ただし、有角石器の刃部の平面形は撥形をしているのに対して、荒海貝塚の石斧は円形であって、刃の厚さもまた厚い。現状では、この石斧の位置づけは困難である。

(春成)

### 3 骨角貝製品

#### (1) 貝小玉

荒海貝塚中央トレンチの千網式土器の混土貝層中から小さな貝小玉（貝珠）が5点出土した。貝小玉は、二枚貝のウミギク類、シャコガイ類、巻貝のイモガイ類、タケノコガイなどの貝殻を小さく割って得た破片に舞錐で穿孔したあと上下面を研磨し、その小片多数を繊維に通して数珠つなぎにし、縁辺を同時に研磨して小玉を作ったものである。

大陸から日本列島にかけて分布する貝小玉を時期別にみた木下尚子の研究によれば、荒海貝塚例は、紀元前 2000～1000 年紀の東日本の分布の南限にあたっている〔木下 1999 : 324〕。しかし、貝小玉を出土し荒海貝塚にもっとも近い例は岩手県アバクチ洞穴であって、その間の距離は 400km ある。

その一方、木下が前 3 世紀～紀元 7 世紀のうちにいれた弥生前期の島根県西川津・古浦遺跡、弥生中期の岡山県南方遺跡の例は、前 1000 年紀のうちにいり、荒海貝塚例とほぼ同じ時期のことになる。時期的にもっとも近い西川津遺跡は荒海貝塚から南西 660km の位置にある。そして、この時期の北海道・東北地方の例が、北海道伊達市有珠モシリ遺跡、岩手県アバクチ洞穴など西日本の弥生文化との交流をもっていた人びとの遺跡から出土していることを考慮すると、荒海貝塚例は東日本の南限の可能性だけでなく、東西日本の交流の所産である可能性を考えたほうがよいだろう。

#### (2) 有鉤短剣

西村正衛らの荒海貝塚第 3 次調査時に、C 地点の C トレンチ 1 区の前浦式土器を含む貝層から「有孔鹿角棒」が 1 点出土している（図 242-1）。かつて筆者が有鉤短剣のうち鳥形短剣と呼んだ鹿角の角幹を主にして第 1 枝と合わせ鉤状にしたもので、復元長は約 20cm である、今回の発掘では、明らかにそれと認定できるものは見つかっていない。しかし、I-3 区から出土した千網式の時期の鹿角（図 242-3）は、研磨したあと角幹の第 1 枝より 2 本の溝を 1 周させただけで角座も除去せず穿孔もしていない加工の少ないものであるけれども、第 1 枝の上下と角幹とを V 字形に紐でくっつけて垂下して使っていた可能性が強い。そうであれば、我孫子市下ヶ戸宮前遺跡から出土した鹿角（図 242-2）も、同様に 2 本の溝（間隔は 4mm）をもち、角座を除去した例よりも簡略化が進んでいることになる。荒海例はこれだけで完成品であり、C 地点出土の鹿角製の有鉤短剣の後裔であり、同時に最後の姿であったと推定する。

この鹿角は、オオカミの左下顎骨（図 242-5）と合わせ、紐をかけて垂れ飾りとして身につけたか、または、住居のような施設の入口などに架けて辟邪の役割を期待していたと考えておきたい。



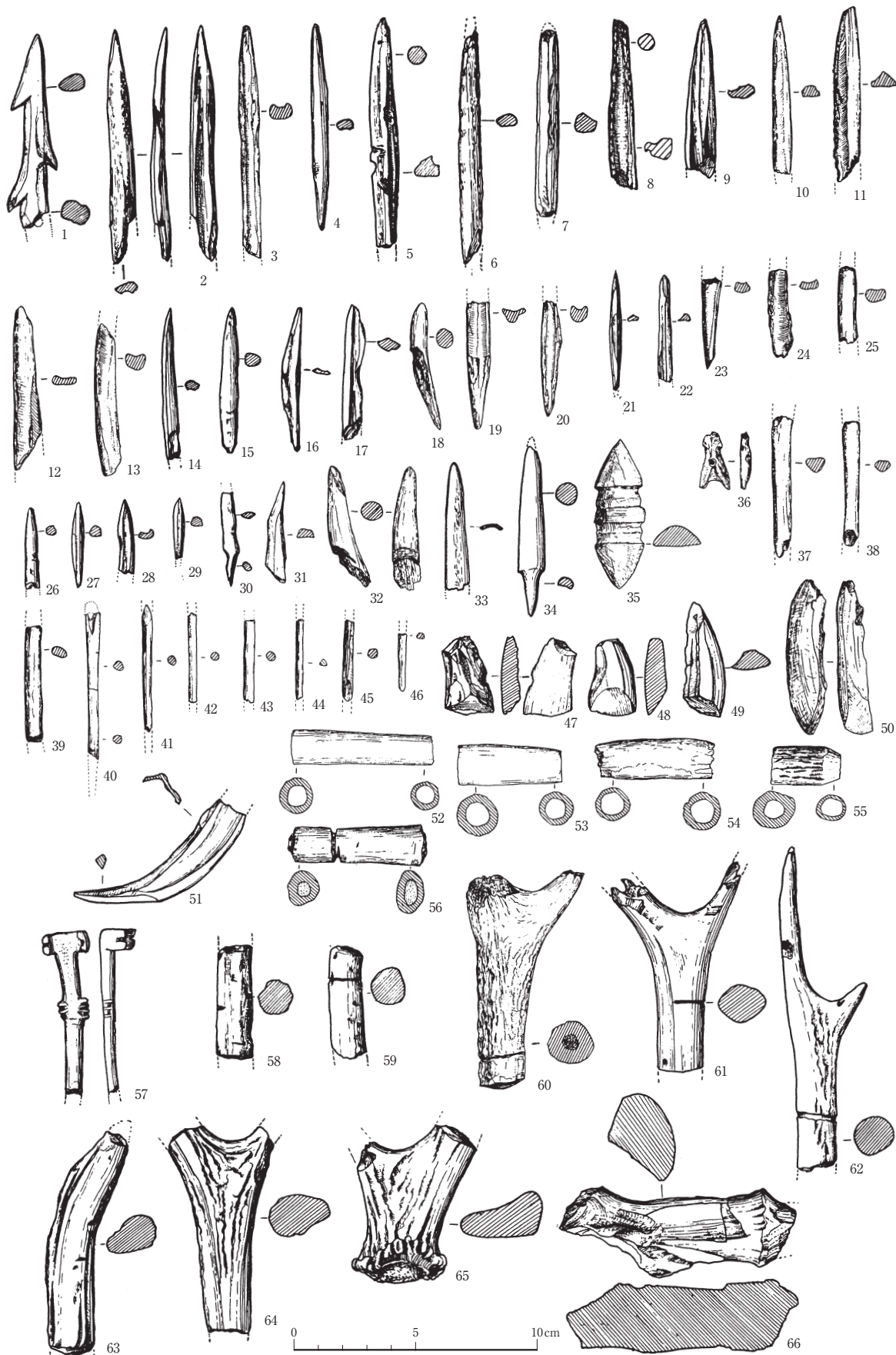


図 241 西村正衛ら発掘の骨角器・骨角製品 [西村 1984]

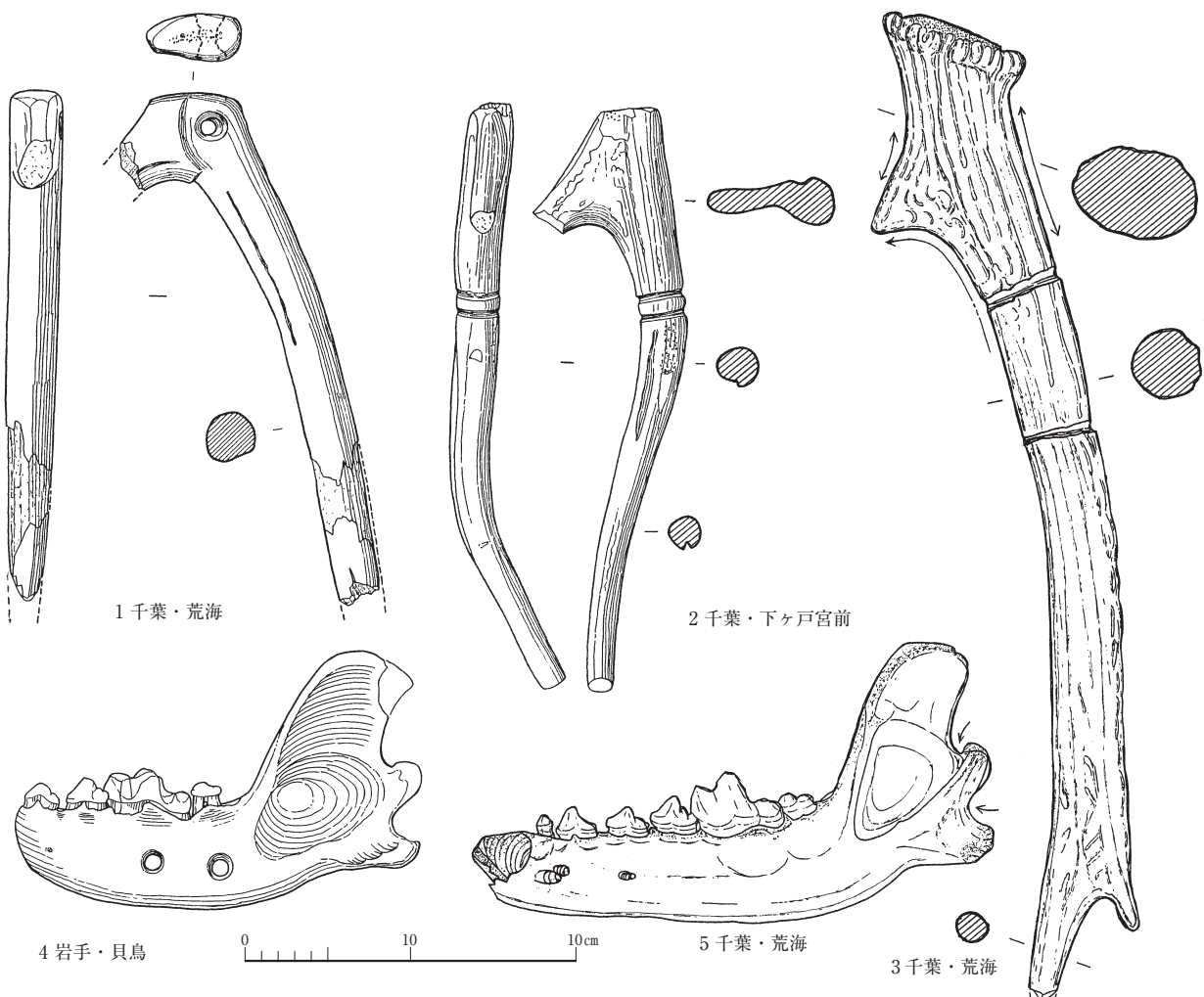


図 242 荒海貝塚出土の有鉤短剣と狼下顎骨の系譜 (3・5の矢印の位置は磨滅)

### (3) 棒状短剣

浮線文を彫刻した鹿角製の断面円形の棒状で先端が尖った角器を、仮に棒状短剣と呼ぶことにしよう。仮にという意味は、剣は身の左右に刃をもつ、つまり身の刃部の断面形が薄い菱形ないしレンズ形を呈する武器をさすから、断面形が円形ならば、尖頭棒と呼んだほうが正確である。しかし、それでは具体的なイメージがわいてこないで、ここでは棒状短剣と称しているにすぎない。

棒状短剣は、荒海貝塚の出土品のなかでもっとも特徴のある遺物である。今回の発掘で1点、それ以前の出土品とあわせると6点に達する。それらのなかには、保存状態が良好な3点をふくんでおり、この種の遺物を研究するうえで、きわめて重要な位置を占めている。荒海貝塚からはさらに、これらの類品でありながら系譜をやや異にするものが過去の発掘で1点出土している。

棒状短剣は、太平洋岸では東北地方の宮城県亘理町椿貝塚から東海地方の愛知県名古屋市西志賀貝塚まで分布し、日本海側では富山県氷見市大境洞窟 [氷見市史編さん委員会編 2002 : 669]、鳥取県鳥取市青谷上寺地遺跡 [北浦編 2001] からの出土が知られている。時間的には縄文晩期後半から弥

生中期まで存在する。ただし、このばあいの東北・関東地方の縄文晩期は西日本の弥生前期と併行する関係にあるので、注意を要する。

棒状短剣は、2001年の川添和暁の集成では17点あり〔川添2001〕、それに荒海貝塚の新例1点、富山県大境洞窟の3点および鳥取県青谷上寺地遺跡の1点を加えると、その数は22点になる。荒海貝塚のつぎに多いのは愛知県清洲町・名古屋市朝日遺跡の4点、富山県大境洞窟の3点、名古屋市西志賀貝塚の2点で、それ以外は1遺跡1点にすぎないから、荒海貝塚から出土した点数は群を抜いていることになる。名古屋市西志賀貝塚、朝日遺跡は、濃尾平野のそれぞれ弥生前期、中期の中核的な集落跡である。大境洞窟は、能登半島基部の富山湾側にあり、重要な場所に立地しているとみてよいだろう。

棒状短剣の系譜は、関東・東北地方では千葉県園生、堀之内、殿平賀貝塚、福島県大畑貝塚などから出土した縄文後期初めの例までさかのぼる〔春成2002：133・137〕。それらは、長さ16～24cm、径2cmほどの先端を鋭く尖らせた細長い棒の基部に紐通し用の1孔をあけ、文様を施していない単純な作りである。北海道アイヌ族は、縄の撚りをこじあげたり、縄の結び目を解くのに一端を尖らせた又状角製品を用いていた〔同前：133・137〕。棒状短剣は最初のうちは、そのような実用的な意味をもっていた可能性もある。

荒海貝塚出土の棒状短剣のうち基部の加工がもっとも複雑な荒海a例は、鹿角の角幹から第1枝が分岐する部位を縦に截断し、第1枝の側を利用したもので、短剣としてみたばあい、基端の左右に耳状の突起をつけ、身の基部より、<sup>つば</sup>鏢に相当する位置に浮線による工字文を施した隆起帯をもっているのが大きな特徴である。今回の発掘で見つかった荒海b例は、これに近いものであろう。

棒状短剣の浮線文が、関東の千網式・荒海式、甲信越の水I式に代表される浮線文土器に由来することはいうまでもない。棒状短剣の分布域も浮線文土器の分布と重なる。

筆者は棒状短剣を浮線文の構成と基部の挟り込みの形状から、つぎのように編年する。

#### 最古段階 千葉県成田市荒海a例、同b例

基部の加工は特異である。鹿角の第1枝が分岐する位置で縦に截断し、その截断面を段状に加工している。荒海a例は、側面形が伸びきったZ字形で、胸を張ったようにみえる基部の上端左右に動物の耳のような突起をもつ。耳には横に1本の線をいれただけの単純な浮線文を施している。鏢に相当する突帯の文様は、沈刻を横3段左右にずらせるようにして浮線をつないでいるが（3段構成）、最上の沈刻と最下の沈刻はつながっており工字文となっている。浮線文は4段で構成し、上段と下段はつながっている。基部の挟りは斜めに削いだ形である。

荒海a例は千網式の混土貝層から出土、今回発掘の荒海b例も基部の挟りと工字文の特徴から、この段階に位置づけることができる。千網5式土器を含む貝層から出土しているので、水I式古段階・大洞A2式と併行する時期と考える。

#### 古段階 千葉県荒海c例、宮城県亘理町椿例、富山水見市大境a例

基部の段状の挟りはやや浅くなっている。椿例の基端は耳状突起が突帯に変わっており、そこに細い線による浮線網状文を施している。文様は3段構成、浮線文は4段、沈刻の最上と最下は分離され、最上と最下は上下同じ位置にあり、整然とした千鳥足状に配している。荒海c例の基部の挟りは浅い。















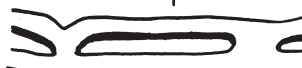





	荒海貝塚	他遺跡
最古段階	 a  b	
古段階	 c  d	  宮城・椿  愛知・西志賀 a  富山・大境 a
中段階 1	 e	   愛知・朝日 a
中段階 2		 愛知・西志賀 b  愛知・朝日 b
新段階	  f	  長野・唐沢

図 243 棒状短剣の浮線文の変遷（〔川添 2014〕に荒海 b 例を追加して作成）

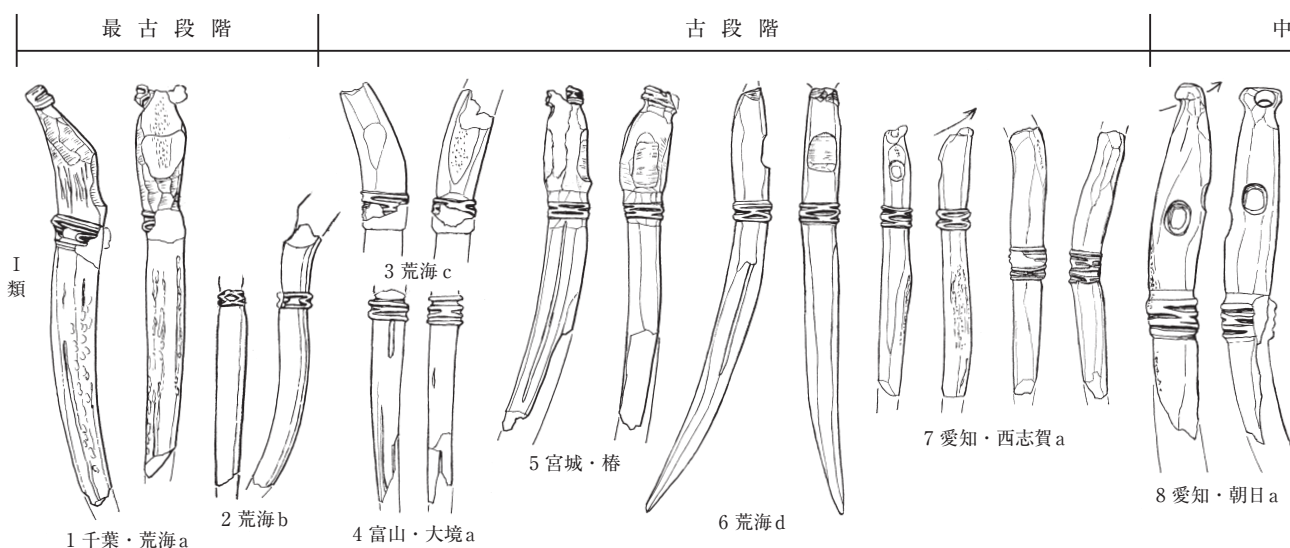


図244 棒状短剣の編年

([川添 2001・2011, 氷見市史編さん委員会編 2002, 北浦編 2001, 西村 1984] に荒海 b 例を加えて作成)

椿例は大洞 A' 式の貝層から出土している。荒海 c・d 例は、荒海 1 式の時期であろう。

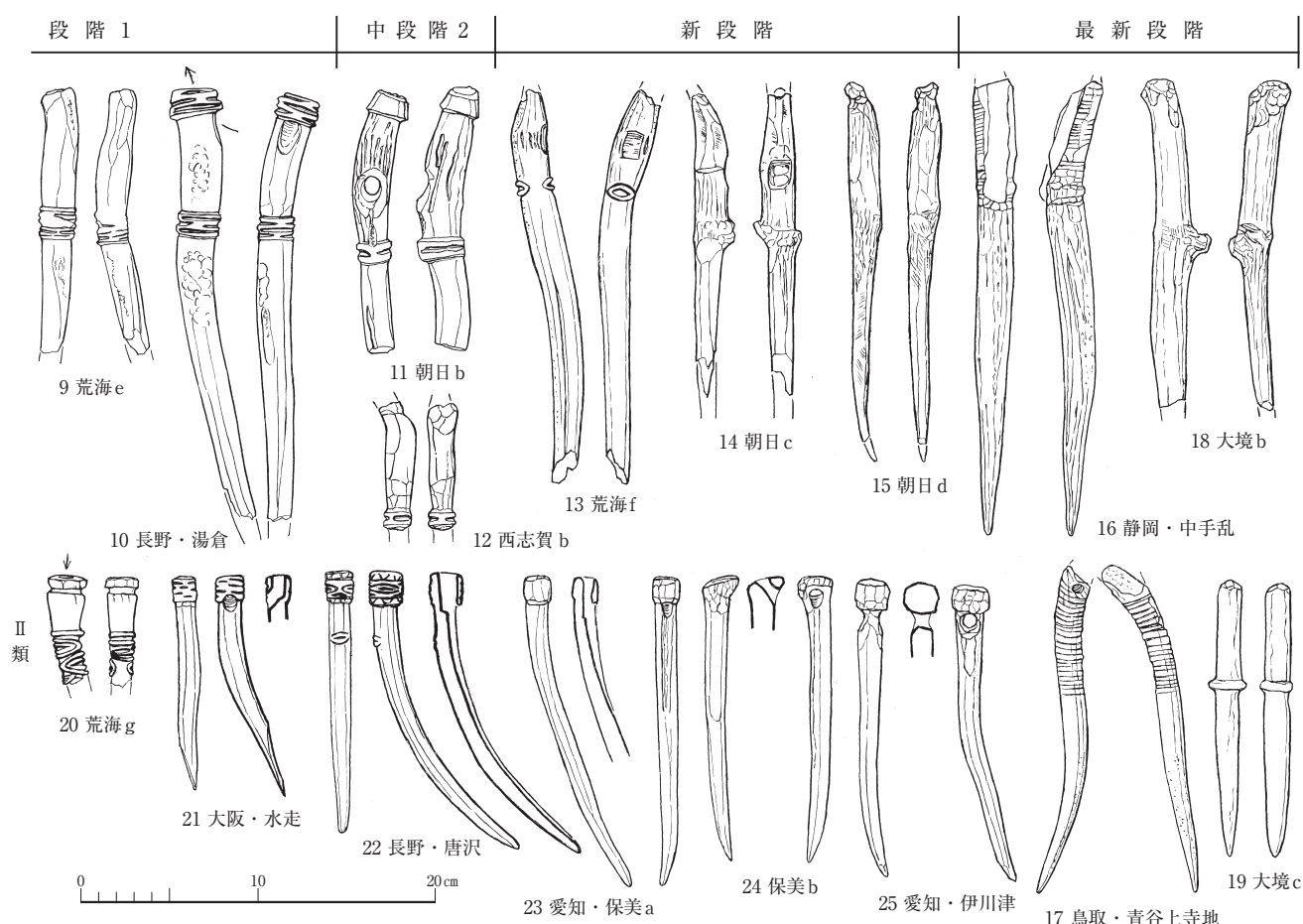
荒海 g 例は、これまでの棒状短剣とは形態を異にしており、前者を I 類と呼ぶならば、II 類と呼ぶべきものである。屈曲した身部に浮線文で二重の楕円形 3 つを三角形に配置し、無文の基部をつけただけであって、I 類から途中の鰐状の突帯を除いた形状を呈する。頭部に孔をあけてあるので、紐を通して垂下したのであろう。荒海 1 式の時期と考える。

**中段階 1** 千葉県荒海 e 例、愛知県名古屋西志賀 a 例、愛知県清洲町朝日 a 例、長野県高山村湯倉例、大阪府東大阪市水走例

基部は、段状の袢りから荒海 d 例では方形の袢りに変わり、さらに西志賀 a 例、朝日 a 例になると円形の凹みに変わる。荒海 d, 同 e, 西志賀 a 例そして最新段階の荒海 e 例の基端が等しく欠損しているのは、意図的なものであろう。基端が完存している朝日 a 例では、荒海 a 例と逆側を向いており、形態の崩れをみせている。側面の穴も、おそらくまちがってあけたのであろう。形態のうえからここにいた荒海 d 例も、突帯の浮線網状文の型式はしっかりしており、古段階と変わらない。荒海 e 例は、基部に浅い袢りをもっている点は古段階の特徴をのこしているが、文様は沈刻を 5 段重ねたうえに乱れが生じているので、この段階に置いておく。朝日 a 例は、沈刻が 4 段で、文様はやはり乱れている。湯倉例は、基部の凹みを斜めの溝状にして頂部に突き抜ける孔にしている。基端にも突帯をめぐらせ、基部とまったく同じ文様を施している。文様は比較的整っている。西志賀 a 例は朝日式～貝田町式を含む II 層下部から出土、朝日 a 例は貝田町式の貝ブロックから出土している。荒海 e 例は、荒海 2 式の時期であろう。

II 類の水走例は、荒海 g 例から基部の無文部を除いて、そこに有文の隆起部を移した形状である。文様は、浮線文の凹んでいる個所を単沈線であらわし、浮線文に似せている。縄文晩期終末～弥生前期中段階の貝層中からの出土である。

**中段階 2** 愛知県西志賀 b 例、愛知県朝日 b 例



基部の挟りは円形の凹みである。朝日 b 例は、凹みは反対側まで貫通する孔になっている。基端の突帯は無文、突帯の文様は 1 段構成、浮線文は 2 段構成で、眼の形は浮線文の彫刻をもっていないが、一応この段階に置いておく。弥生前期新段階の時期であろう。

**新段階** 千葉県荒海 f 例、愛知県朝日 c 例、同 d 例、長野県真田町唐沢例

荒海 f 例は、基端の状態は欠損しており不明。基部は中央に方形の浅い凹みをつけている。突帯の文様は 1 段構成、浮線文は 2 段で、レンズ形（眼の形）を独立させ正面と反対面に各 1 単位施文しており、それまでのような突帯が 1 周することはなくなっている。朝日 c 例、同 d 例は、1 歳の鹿の 1 本角を利用して、角座を鐙状突帯にあてており、角座を鐙状突帯にあて、角座骨から一部前頭骨まで取りこんで製作している。朝日 d 例は単純化しているが基端が頭状を呈する。

朝日 c 例、同 d 例は、弥生中期貝層内から出土している。荒海 f 例は、荒海 3 式～4 式の時期までくだるのでろう。

II 類の唐沢例は目の形を 1 単位施文しているだけである。

**最新段階** 静岡県静岡市（旧、清水市）中手乱例、鳥取県鳥取市青谷上寺地例、富山水見市大境 b 例、愛知県田原市保美 a・b 例

中手乱例、青谷上寺地例は、無文化した低い突帯を痕跡的にのこしたもので、荒海 f 例のような棒状短剣の形態をよくのこしている。基部いっばいに細く浅い沈線をめぐらせているのは、新たな



展開である。

大境b例は、加工が粗く基部端の研磨も穿孔もないので、未完成品の可能性が大きい。鏢状の突起はなく、その位置に瘤状<sup>こぶ</sup>の突起を1つつけている。大境c例は、柄と身が真っ直ぐにつながっており、基部端は単純に終わっており、これまでの棒状短剣とは形態を異にする。しかし、剣身の断面は円形、幅せまく無文化した鏢状の突帯をもっており、棒状短剣が変化したものであることを示している。

中手乱例は弥生中期前葉の条痕文系の壺に内蔵されていた。青谷上寺地例は弥生中期、大境b・c例も弥生中期の層から出土している。

Ⅱ類の保美a・b例は、唐沢例が文様を完全に失ったものである。

以上のように、棒状短剣Ⅰ類を5段階に分類してみると、荒海貝塚出土品は、浮線文を施した例としては、他遺跡からの出土をみない工字文を施した最古段階のa・b例から、簡略化がすすんで目の字形文に変容した新段階のf例まで含んでおり、特に注目すべき点である。このことは、浮線文をもつ棒状短剣が生成し消滅するまで、すなわち関東南部の縄文晩期末から弥生前期末にかけて製作・使用者の中心が荒海貝塚付近に存在した可能性を示唆する。古段階に分布の東端が荒海貝塚からいきなり宮城県椿貝塚までとんでいるのも、椿貝塚で製作したと考えるよりも、荒海貝塚付近で製作したものを、椿貝塚まで運んで使用したと推定すべきであろう。同様に、古段階～中段階1の富山県大境洞窟a例と愛知県西志賀貝塚a例も、荒海付近からの搬出品であった可能性がある。

棒状短剣の耳状突起に横方向に1本の短い沈線を入れた側を正面とするならば、反対面の加工は単純であるから、正面と裏面の区別が存在するのであろう。熊の耳、フクロウの頭部、あるいは突出したカエルの眼を連想させるような表現をもち、基端の耳状突起は朝日a例、同c例に頭状突起に変化しながらも継承されていることからすると、何か具象的なものを基部にあらわしていると考えられる。荒海貝塚出土の最古例も、基部の表現は出現した時からすると、すでに簡略化している可能性がある。最古段階のし字形の挟りが中段階1でコ字形の挟りになり、さらに中段階2で隅円方形の穴に変化しながらも不可欠の要素としてそれをあらわすことにこだわりつづけているのは、仮に熊の頭部の表現だとすれば、大きく口をあけた状態を本来あらわしていたからではないだろうか。もしそうであれば、荒海貝塚の人たちは熊を尊崇の対象にしていたことになり、ほぼ同時期の北海道伊達市有珠モシリ遺跡などでスプーンの基部に熊の全身像をあらわしていることとの関係も問題になってくるだろう。

荒海貝塚の出土例はすべて貝層から見つかった<sup>(4)</sup>。個人に属する標章としての意味をもつ鹿角製装身具であるけれども、他遺跡出土品をふくめても埋葬人骨に伴った例は皆無である。この点は荒海貝塚C地点から出土した鳥形短剣が貝層からの出土であったことも共通し、さかのぼって縄文中期の翡翠の大珠が貴重品であったにもかかわらず墓から出土した例が稀で、大部分は遺物包含層や貝層から廃棄された状態で見つかることと通底する性格をもっている。棒状短剣は生前は個人に属していても私財ではなく、部族長のような人物が鞘に入れて身に着けていたとしても、死亡すると個人から離れるような公的な性格をもっていたと考えるほかはなく、そこに棒状短剣のもつ意義に迫る鍵が隠されているのであろう。

(春成)

---

 註
 

---

(1)——図 227-235 は、設楽が 1980 年に早稲田大学の西村正衛氏のもとに通い、中島博司氏・三宅裕氏の助力を得て採択・実測した資料である。ほとんどがすでに公表されているが、掲載にあたっては早稲田大学の高橋龍三郎氏に許可をいただいた。これらの土器は第 1・2 次調査の数回にわたる報告と、1984 年の総括論文に掲載されたものの一部である。

(2)——山内清男氏が西村正衛氏に「荒海は A・A'でおさえなければだめです」と語ったことを、西村氏から教示していただいた。

(3)——雑書文の菱形の区画に入る入組文が安行 3d 式からの系譜をたどることができるとすれば(石川日出志教示)、雑書文は遅くとも大洞 A 式に成立しているので、鈴木 of 荒海 1 式は大洞 A 式に併行する氷 I 式古段階にさかのぼる可能性がある。そうなると 18I 区の資料も荒

海 1 式の範疇でとらえなおさなくてはならない。今後の課題である。

(4)——棒状短剣の出土状況と、文様の説明はつぎのとおりである。荒海 b 例以外は〔西村 1984: 624-625〕による。

荒海 a 例 B トレンチ 8 区混土貝層下部から出土。頸部に「変形工字文風の文様」を施している。

荒海 b 例 (今回の発掘品) 中央トレンチ 18I 区の貝層 (千綱式土器の層) から出土。

荒海 c・e・g 例 G トレンチと I トレンチの貝層から出土。

荒海 d 例 E' トレンチ混土貝層下部から出土。頸部に「大洞 A' 式文様と対比される彫刻文」を施している。

荒海 f 例 B トレンチ 3 区混土貝層下部から出土。頸部に「レンズ状の形が浮き彫りされ」ている。

---

 文献
 

---

- 柿沼修平ほか 1985・1986・1987・1997『大崎台遺跡発掘調査報告書』I～IV、佐倉市大崎台 B 地区遺跡調査会。
- 川添和暁 2001「「棒状鹿角製品」小考」『研究紀要』第 2 号、1-12 頁、愛知県埋蔵文化財センター。
- 北浦弘人編 2001『青谷上寺地遺跡 3』鳥取県教育文化財団調査報告書、72。
- 菊池真太郎編 1979『千葉市城の腰遺跡』千葉県埋蔵文化財センター。
- 木下尚子 1999「東亜貝珠考」『先史学・考古学論究Ⅲ』315-354 頁、龍田考古会。
- 穴戸信悟・谷口 肇編 1991『砂台台遺跡Ⅱ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告、20、本文編。
- 白井久美子・島立 桂編 1994『千原台ニュータウン 6』千葉県文化財センター調査報告、241、千葉県教育振興財団文化財センター、千葉県。
- 杉原荘介 1967「千葉県宮ノ台出土の石器」『案山子』第 1 号、5 頁、付図 1、日本考古学協会生産技術研究特別委員会農業部会。
- 鈴木正博 1981「「荒海」断想」『利根川』1、1-3 頁、利根川同人。
- 鈴木正博 1985「「荒海式」生成論序説」『古代探叢Ⅱ』83-135 頁、早稲田大学出版部。
- 高柳圭一 1996「第 2 集中地点」『市原市武士遺跡 1 福増浄水場埋蔵文化財調査報告書第 2 分冊』(『千葉県文化財センター調査報告』第 289 集) 106-111 頁、千葉県水道局・財団法人千葉県文化財センター。
- 谷口 肇 2003「ポスト浮線文—神奈川周辺の状況—(その 2)」『神奈川考古』第 39 号、131-160 頁、神奈川考古同人会。
- 豊田秀治 2003「番後台遺跡」『千葉県の歴史』資料編、考古 2 (弥生・古墳時代)、140-143 頁、千葉県。
- 中沢道彦 1998「「氷 I 式」の細分と構造に関する試論」『長野県小諸市氷遺跡発掘調査資料図譜 第 3 冊』1-21 頁、氷遺跡発掘調査資料図譜刊行会。
- 中山正典・小林孝誌編 1991『角江遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告、30、静岡県埋蔵文化財調査研究所。
- 西村正衛 1961「千葉県成田市荒海貝塚—東部関東地方縄文文化終末期の研究—(予報) —」『古代』第 36 号、1-18 頁。
- 西村正衛 1974「千葉県成田市荒海貝塚 (第一次調査)」『早稲田大学教育学部学術研究』第 23 号、25-56 頁。
- 西村正衛 1975「千葉県成田市荒海貝塚 (第二次調査) —東部関東における縄文後、晩期文化の研究 (その二) —」『早稲田大学教育学部学術研究』第 24 号、1-25 頁。
- 西村正衛 1976「千葉県成田市荒海貝塚 (第二次調査) —東部関東における縄文後、晩期文化の研究 (その二 続き) —」『早稲田大学教育学部学術研究』第 25 号、15-28 頁。
- 西村正衛 1984『石器時代における利根川下流の研究—貝塚を中心として—』早稲田大学出版部。

- 
- 西村正衛・江崎 武・馬目順一・平野吾郎・原 信之・大久保 進・戸田 健 1965「関東地方における縄文式最後の貝塚―千葉県成田市荒海貝塚―」『科学読売』第17巻第10号, 27-39頁, グラビア写真。
- 蜂屋孝之 2004「特殊な遺物」『千葉県の歴史』資料編, 考古4(遺跡・遺構・遺物), 586-597頁, 千葉県。
- 春成秀爾 2002「有鉤短剣と腰飾り」『縄文社会論究』131-204頁, 塙書房。
- 氷見市史編さん委員会編 2002「大境洞窟遺跡」『氷見市史』7, 資料編五, 考古, 625-675頁, 氷見市。
- 村田喜久夫編 1983『西太田遺跡』伊勢崎市文化財調査報告書, 17, 伊勢崎市教育委員会。
- 渡辺修一 1994「縄文晩期終末から弥生中期前半の土器群について」『四街道市御山遺跡(1)―物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ―第2分冊』(『千葉県文化財センター調査報告』第242集)164-177頁, 住宅・都市整備公団。
- 渡辺修一 2007「荒海2式の研究―浮線文直後の土器群―」『千葉県立中央博物館研究報告』人文科学, 第10巻1号, 1-20頁。
-